

(題字 松陰先生筆蹟擴大攝影)

大正十二年十二月發行

校友會雜誌

第貳拾貳號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 荻中學校 校友會雜誌第貳拾貳號目次

修 養 一頁

無駄閑記 瀧口吉良

文 苑 一〇頁

夕立の朝 藤野 一
 夏の夕空を觀た全の感想 板垣 禮秀
 夏の夕 川岡 良
 夕立 香川 好
 夕立 詠村 三
 木村 好
 原木 好
 池上 武
 齋藤 友夫
 山根 信
 藤田 一郎
 大野 清
 野村 吉
 中野 秋
 山中 昌
 松尾 政雄

友の信書を見て 友の信書を見て
 汽船中の記 車中の記事
 歸省途中 吉田松陰
 車中の記事 西郷隆盛
 友の信書を見て 大海の旭日
 魚釣り 落日に對して
 休日誌の一節 海水浴
 落日に對して 歸省
 我が里の夏 落日に對して
 自警の辭 男子の本領
 我が郷土の人物 旅行の趣味
 旅行の趣味 旅行の趣味
 縁陰書を讀む 縁陰書を讀む
 縁陰書を讀む 縁陰書を讀む

平村 木田 清七
 臨本 村 輝
 小木 磯 美
 黒崎 山 三
 宮崎 誠 治
 増山 美 郎
 長崎 和 繁
 藤田 清 義
 波田 美 音
 末田 益 義
 有田 美 義
 大有 村 義
 岸大 多 野
 波大 多 野
 大波 多 野
 横山 多 野
 竹野 孝 幸
 河野 健 孝
 野村 久 達
 倉重 達 皓
 福島 益 皓
 兼島 益 皓
 内山 益 皓
 内本 益 皓

修學旅行記の一節
 修學旅行記の一節
 男性美
 男性美
 都會田舎
 都會田舎
 機械の力と人の力
 機械の力と人の力
 過去と未來
 過去と未來
 都の友に
 都の友に
 舊の友に

小方 三治 數馬
 杉原 丙三 治馬
 弘中 節勝 三治
 田原 節夫 三治
 柏村 正夫 三治
 惠美須屋 三吉 正夫
 福田 雄雄 三吉
 藤成 一郎 雄雄
 追山 六郎 雄雄
 上村 義六 一郎
 長嶺 正義 一郎
 吉村 恒正 一郎
 三輪 茂助 一郎

神戸高商より
 山口高校より
 明専より
 福岡高師より
 東京高師より
 同志社大學より
 長崎高商より
 五高より
 神田 有田 勝正
 野 孝夫 秀彦
 宮 國 秀彦
 小 川 秀彦
 鳥 居 芳夫
 岩 田 勝夫
 山 根 熊夫
 井 町 熊夫
 井 町 熊夫

英文

Hanako and the Morning-glories. Shozo Kawamura.
 Tran quility of Hagi. Seiji Mihara.
 The Great Quake and its Instruction. Kosei Yokoyama.
 Choice of Companions. Tomoichi Okada.
 Man and Machinery. Heizo Sugi.

卒業生通信

四學年 修學旅行記 五二頁
 卒業式 生徒受賞者 先生の更委 學友區幹部 五七頁
 校報 六七頁
 校誌 六二頁
 會報 六二頁
 附錄 同窓會記事 一頁

山口縣元
 萩中學校

校友會雜誌第貳拾貳號

修養

無駄閑記

明城 瀧口 吉良

來る十一月發刊の萩中學校校友會雜誌へ、何か一つ老生の寄稿せんことを、雜誌編纂主任の先生より岩田校長を介して御照會ありける折に、校長には老生に對して、大に若返りて以て青年諸子を相手に氣焔を吐いて貰ひたしとの條件までも附せられたりき。
 今や時は方に玉露金風、清氣入骨、燈火可親、強勉宜人の秋なれば、則ち大に勇氣を鼓舞し、當年の齋藤別當實盛を氣取りて以て文壇に立ち顯れ、大童となりて青年諸子「御參なれ」と獅子吼して、管城子を驅り以て校長貴下の期待に副ふべき所なるべきも、老生本來粗笨なる頭腦の持主にして、隨て腹笥空しく、如何とも爲すべき術を知らざるなり。
 そも無より有を生ずることの不可能なるは、千古の哲理なれば、斷然其の委囑を固辭して、校長貴下の軍門に降伏すべき筈なるも、さりどてはあまり意氣地なく、臍甲斐なきものとして指彈せらるべく、

貴下の一友人として貴下を辱しむるの虞あり。誠に進退相谷りけるが、所謂窮すれば通ずてふ格言の如く、漸くこゝに一つの愚案を絞り出せり。其の愚案とは何ぞや。曰く、近くは我先師福澤先生、遠くは支那、印度、西洋よりして、今や長へに地下千尺の下に安眠せる大偉人を起し來りて、以て此の文壇に大氣焰を吐かしめんとすこと是なり。蓋し青年諸子の度膽を抜きて、其の後へに瞳若たらしめんと欲するにあらずして、諸子が克く是等大偉人の格言を咀嚼して、これを服膺し、之に私淑して大器を成就し、大に國家前途の爲に貢獻せられんことを要望するに在り。諸子幸に焉を諒せられよ。之より左に其の偉人達を紹介せん。

福澤先師

「自尊自重」。

「獨立自尊、是修身」。

「自由者、在不自由之中」。

佛者

「以心傳心」。

「諸惡莫作、衆善奉行」。

「即心即佛、娑婆即寂光淨土」。

馬援

「丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯」。

唐太宗

「以銅爲鏡、可以正衣冠、以古爲鏡、可以見興替、以人爲鏡、可以知得失」。

李卓吾

「富莫富於常知足、貴莫貴於能脫俗、貧莫貧於無見識、賤莫賤於無骨力、身無一賢曰窮、朋來四方曰達、百歲榮華曰夭、萬世永賴曰壽」。

彌爾烈爾

「世界者大學校、困苦者良師友」

珥士禮立

「品行心志、不仰于高者、必俯于卑、精神意氣、不冲飛于天者、必匍匐于地、」

勃古斯敦

「心志一定、則可以投烈火、可以衝飛丸、可以死、可以生、凡地球上莫有不可爲之事、夫爲富貴所淫、爲貧賤所移、爲威武所屈者、坐無一定心志耳」

回顧すれば、今より四十有三年以前、乃ち明治十四年五月の交、老生が阿武見嶋郡書記てふ刀筆の吏たりし時、一朝時事に感ずる所ありて、突然辭表を捧げて萩地を脱走し、笈を負うて東都に赴き、慶應義塾に入學して、先師福澤先生に親炙し、多年其の薰育陶冶の鴻恩を享けたることを追懷すれば、轉た感慨に禁へざるものあり。茲に既往を憶念せんが爲に、先師の作詩數句を摘録して、以て青年諸子に紹介し、其の一讀を煩はして、諸子が髣髴の間に、先師の偉大なる人格を會得せられんことを欲するや切

なり。諸子幸に老生の微忱を酌まれんことを。

福澤先師の詩

秋夜天如水、秋江水似天、

飄飄舟一葉、碎月入無邊、

×

黑雲吐明月、霖雨報晴天、

天變與人事、由來不偶然、

×

父母生吾妻輔吾、滿門子女常相娛、

乃翁別有保身法、三十餘年與汝俱、「手用米搗石臼銘」

×

鄙事多能年少春、立身自笑却壞身、

浴餘閑坐肌全淨、曾是綿絲縫嫁人、

×

一面真相一面空、人間萬事邈無窮、

多言語去君休笑、亦是先生百戲中、「福翁百話序詩」

×

道樂發端稱有志、馬鹿骨頂爲議員、

賣盡傳來田畠去、贏得歲費八百圓、「狂詩」

因記、當時衆議院議員は歳費八百圓なり。

×

×

×

×

右の一篇は明城瀧口翁が、編輯主任學校長を介して、雑誌を通じて生徒諸子に訓戒の辭を賜はらんことを請ひしに對して、物せられしものなり。翁の好意に對しては、厚く感謝する所なり。茲に巻頭に載せて生徒諸子の精讀を願ふ。

他山の石

他山の石玉を磨くべし。我等は他縣中等學校生徒の狀況如何を知ることが、我等の修養上極めて裨益するところあるべきを思ふ。幸に諸先生は毎年各地方の中學校を視察せられて、その報告を當局に提出せられるので、今大正十一年以後の報告中我等生徒の修養に資すべきもの二三節宛を抜いて次に掲げおく。(文體は便宜上口語體に改めて、文章も大部分は簡略して、必ずしも報告の原文には拘泥しなかつたことを附記しておく。)

□兵庫縣立第一神戸中學校、本校の教練は終始規律正しく、しかも生徒幹部の行動よく連繫を保持し、秩序整然としてゐる。都會地にかゝるを見るのは意想外である。

□運動會に於ける應援の彌次氣分は、近來流行遅れとなつて、一般に隊形を整へ、一定の小旗を持ち、

應援歌に合して調子よく之を振り、如何に綺麗に整然と行はるゝかを競ふ風がある。爲めに學校によりては應援部を特設して、教員の部長を置いてゐるところもある。

□京阪地方の生徒は一般に自學自修の風に富む。生徒は從順にして眞面目に授業に臨んでゐる。

(以上山本百合熊先生報告より)

□神戸第一中學校にては、英語は一年七時間、二年八時間、三年以上九時間で、苛重と思はるゝまで生徒に仕事を課しつつあるも、生徒の素質能く之に堪へ得る脳力と奮闘力を有して、教室に於ても愉快なる活動をしてゐる。大正十一年度には四年生より四十二人、卒業生より五十餘人の高等學校入學者を出してゐる。

□同校にては校長鶴崎氏の二十五年勤續謝恩記念として、卒業生より貳萬圓の基金を集めて、其の利子で苦學生の學資の補助、教員慰勞費、圖書購入等をしてゐる。

□京都府立第二中學校では、特に圖書部を設けて、生徒は毎月參拾錢宛を出金して各科の圖書等を購入してゐる。英語科の如きは既に七百餘圓を投じ、生徒の自修研究に要する註釋書及辭書等を購入して、各教室に備付け、晝食時及放課後生徒は随意に閱覽研究してゐる。生徒の自治的精神の旺盛なるには驚嘆せざるを得ない。この圖書は開放的に教室に備付あるが如きもその一例である。教室内教師用机には常にチヨークの備付あるに係はらず、之が紛失の患もなく、それを以て落書するものもない。生徒が上下一致和氣藹々の裡に、總ての自治機關の運轉しつつあるは美望に堪へない。

□同校にては生徒が學年を示す徽章をつけてゐない。上級生が徒らに其の權威を下級生に振ふこともな

く、下級生は柔順に上級生の指導に信頼してゐる。人事に關する處罰問題などの起つたことは殆どない。□京都府立第一中學校では、大正十一年度に於て、四年修了者より高校に入りしもの十八名、大學豫科に三名、五年修了者より高校に二十八名、其の他の學校に十八名合格してゐる。

□都會地の中學生は概して田舎の中學生に比して、英語の實力は優秀なるを感ずる。又研學の精神に於ても遙に旺盛なるものがある。英作文の練習問題を持ち來らざるもの殆どなく、其の墨板に書く文章に誤の少き、質問應答の敏活にして盛なるは感すべきである。

又彼等は學校内では極めて温順にして、校則を遵奉することを了解し、上衣のボタンを外し胸を開け居る者、殊更に破衣破袴を着け居るもの、泥土に汚れたる靴を穿ち居るもの、如きは、殆ど見當らない。上級生でも如何にも子供供して、眞に文化に富める人類たるの感を深くせしめる。

(以上伊藤徹成先生報告より)

□大阪府立高津中學校では國漢文には多讀主義をとり、普通の教科書の外に副讀本と藩翰語、保元平治物語抄、近世名著文抄、花月草紙抄、近古史談、十八史略、史記、名著漢文選、唐宋八家文等を課してゐる。尙五年級には課外として徒然草及孟子がある。同校にては英漢數國の如き學科は、期日を豫告せないうで隨時に且頻繁に試験を行つてゐる。時に依りては其の日に教授すべき所で、未だ教授しない所でも問題に出してゐる。

□和歌山縣立和歌山中學校では、卒業生と母校との關係が比較的よくとれてゐる。和歌山市には土曜會及體育獎勵會といふものがある。此の二つは共に同校の卒業生と、市内の有志者の組織せるもので、是

れに依つて卒業生と母校との連絡を保つてゐる。

同校は運動の盛大なるを以て全國に有名であるが、これは右の體育獎勵會などがある爲で、この會の牛耳を執つてゐるのは、卒業生にして同市の名望家なる出來助三郎氏で、同氏は時に私費を投じて選手を他校に引率し、或は慰勞會なども開くといふことである。

□京都府立第三中學校では、卒業生全部で組織せる學友會がある。會員は毎年壹圓の會費を納める。古き卒業生でも會費を意納する者は極めて少い。

學友會の事業としては、毎年二回總會を開き、毎年一回會報を發行する。其の他生徒の圖書室に圖書を寄附し、運動器具等を寄附することがある。目下前校長の遺族の爲に弔慰金を五千圓募集中である。

□姫路中學校では已に三十二回の卒業生を出し、卒業生二千六十二人ある。同校の卒業生の團體は本部を東京に置き、各地方に支部を設く、姫路市にも支部が置いてある。會費は母校卒業前一年級の時から毎年壹圓納入することになつてゐる。

(以上河野先生の報告より)

□大阪府立市岡中學校では、特志の生徒が時々作品を持ち寄りて小展覽會を開くことがある。其の成績品は頗る佳良なるものがあつて、中には天才的のものもある。京都府立第二中學校は教室も整頓し、生徒の服裝も正しく、「コート」に墨一つもなく、小石などある時は自ら之を拾ひとるやうにしてゐる。

(以上上田總先生の報告より)

□大阪府立茨木中學校では、生徒は従順で質朴で氣持がよい。體操見學の生徒は教師の命令を待たず進

んで水泳場の除草及土工作業をしてゐる。此の學校の水泳は有名であるが、生徒は活氣溢れ、各組選手は一時間の水泳に、殆ど休むことなく猛練習をしてゐた。その意氣の旺なる模範とすることが出来る。

(以上相島先生の報告より)

□東京府立第一中學校に始業の際に行つたが、全校生徒は各組毎に整列し、其の組代表生徒の引率で兩側の入口から隊伍整然と二列縱隊で教室に入つた。授業終了後も入室前の場所に整列して解散した。教室出入の模様が秩序よく整然と行はるゝことによつて、學校訓練の一斑を窺ふことが出来る。體操科授業の際、整列したる生徒が概して容貌引き締り、態度端正で何處となく削巧氣に上品に見える。規律正しく動作敏活で言語の明瞭なる點からしても、市内各小學校より拔擢されし優良生徒の集合たることが想像せられる。(以上井村先生の報告より)

□島根縣立松江中學校の生徒間には矯風會といふものが組織せられてゐる。自治的に一般生徒の風紀取締をしてゐる。同會員は十名よりなり、五年級生徒より互選する。會員に選ばるゝ者は、何時も級中に品行學力等他に勝れ、一般生徒の信用を集めたものであるから、其の取締も理想的に行はれ、校規の振肅に偉大なる効果を擧げてゐる。本年の如き會員中の一名は、夏期休業中三週間餘も郷里に歸らずに滞在して、時々市中を巡視した程である。生徒に不都合の者があつて、訓戒を加へた時は、之を生徒監の先生に報告することになつてゐる。(以上駒田先生の報告より)

本號から文苑復活せしめました。なるべく多数の人の文章を掲載するため、小品と制限しました。掲載の文は悉く夏季休業中の宿題から選擇しましたので、同一文題のものも多くなりました。

夕立

第一學年 水野 一郎

なまぬるい風が表の窓からはいつて、床の間の掛物をはた／＼とさせた。ばら／＼と降り出した大粒の雨、其の二粒三粒が庭の乾いた砂にくるまつたと見る間に、凄い音を立て、一度に降り出した。お父さんは急いで戸を閉める。お母さんは結ひかけの髪を片手で抑へ飛んで出る。折角の乾物も大方濡れた。びか／＼と電光が光る。室の中は急に濕つて来た。便所の脇の手ふきが濡れて重さうにばたり／＼と音を立てる。ごろ／＼と空を駆

け廻る雷の音。雨戸の隙間から外を見ると、軒の雨垂は瀧の様で、目に見える限りは雨の噴水に包まれてゐる。暫くすると雨はぱつたり止んだ。閉めた雨戸を開けると夕陽がさつと木の葉を照した

夏の朝

第一學年 藤井 秀夫

四季の中で景色が一番よいのは夏の朝である。朝早く起き出でて外にいで、橋の上に立つて東の空を眺めた時の氣持は何とも言はれない。太陽は今にも出でようとして紅色をおびて居る。空には彼方此方に白雲が出て、ちようど浮城の様である。其の影が川に寫つて居る様は、何とも言はれないよい景色である。川下の方からは家鴨が三羽仲善く上つて来る様は愛らしい。川邊の草には銀の如き露の玉が澤山着いて居る。僕はそのよい景色を後にして、我家の池の側に來た時、ぱつと明るくなつたので東の空を見た時には、最早太陽は二三

寸計り山より上つて居る。それと同時に池の側の葡萄の木にとまりて寢て居た赤とんぼは、飛び立つて彼方此方と飛びはじめた。

夏の夕空を觀た余の感想

第一學年 板垣 禮作

睨んでゐた新聞を見離して、顔を上げると隣の白壁は眞赤になつてゐる。「夕焼だな」と思つて出ると、一抹の赤雲、血の様に西空を靡いてゐる。ムツクリと此の寂寞を破る一端の入道雲の、紅空を掠めたつてゐる雄景は實によく點綴してゐる。實に華やかなしかも男性的の色彩を持つてゐる。此の雄大な、又美麗な自然の美を、此の儘にして逝かしむるのは何だか惜しい様に感じ、急に寫真にでも取りたい様な氣がすると、もう寫真機が欲しくてたまらない。が父は余の此の願を叶へるだらうか?と色々疑つた。余の空想は活動寫真のフィルムの様はクル／＼とそれからそれへと移つ

てゆく。

余の願望は諦心で壓せられただらうか。「何、願つてみればどうにかなるだらう。」
非常の決心を抱いてだしぬけに「寫真機を……。」
氣が引けたのかしまひの言葉は出せなかつた。父は何故だか余の願を容れなかつた。憤慨に充ちた足を外へ運んで西方を眺めると、これは意外、かはどに賞すべき雄大な景色も、かき消す様に最早碧空に變じてゐる。人工の美よりも勝る天然の美の、四季に孕まれて成る空の景色は實に言語に絶してゐる。此の夏のしかも亦觀得る事の出來難き壯大美妙の觀を逸したのは、余の最も落膽する種である。

夕立

第一學年 峰岡 良文

一陣の風吹き來り、吊されたる簾を軽く動かし、空を見れば墨を流したるが如き黒雲、龍の猛

り狂ふが如く空を走り出した。と見る間に空は全く黒雲に包まれた。今又一陣さつと吹きて庭木をゆすつた。大粒の雨「ポツリ、ポツリ」と降り出した。さあ夕立だ。大騒ぎ、乾物を入れる者、道を急ぐ人、雨戸を開ける者、種々様々だ。雨戸を開ければ家中は薄暗だ。ごろ／＼鳴る雷、びか／＼光る雷光、天地もくつがへらんかと疑れる位だ。隙間より見れば雨は瀧の如く落水してゐる。稍ありて雷雨は、はたと止んだ。外に出でて見れば虹の橋が掛つてゐた。最早日照り、向ふの方は日傘をさし行く人も見えてゐた。水は大分溜つてゐた。夕立後は實に心持が善い。まだ雨戸を開ける音も聞えてゐた。

夏の夕

第一學年 香川 保政

蟬の音がはたと止んだ。何處からともなく涼しい風が頬をなでては去る。あゝ氣持のいい事、は

でやかな晝にひきかへて、夜の淋しき、僕は庭下駄をはいて、こゝかしこをさまよつて見た。照りつけられて弱り切つた、木々の打水がポタリと金魚池の上に落ちた。赤い頭を水に出して、ガブ／＼と食物を求め様を見ると、ほんとにいぢらしい側の朝顔を見た。噫かはいさうなあゝの姿、朝の元氣とは全く反對でうちしほれて居る。三日月が出た。庭中を照して居る。僕は美しい光を仰ぎながら、唱歌を唄つた。木々の葉にはダイヤモンドの様に露が輝いて居る。もう風はつめたくなつた。僕は急いで椽に上つた。何と夏の夕は静かで、思ひ深い事であらう。

夕立

第一學年 詠村 洋

一天拭ふが如く晴れ渡つて、燦くが如く照り付けた夏の一日、北方に一團の黒雲が湧き出た。見る内に其の雲は段々と廣がり初めた。まるで「ハ

クテリア」の殖える様だ。冷たい風がすーと顔を撫でる。忽ちばつり／＼と大粒の雨が落ち出したと思ふ間もなく覆盆の大粒、それと云ふ間にあちらこちらに「がら／＼／＼」と雨戸をしめる音、道行く人は駈走で急ぐ。軒の雨だれは瀧の如く、忽ち庭は池と變じ、石にあたつた雨は「ばん」と打ちかへる、頭上にて「ゴロ／＼」と鳴る雷の音はまるで戦場の如く物凄い。最早三十分も経つたかと思ふと、今までの雷鳴、雨音はとことなく逃げ去り、たゞ遠くでゴロ／＼とかすかに鳴るばかりだ。

夕立

第一學年 木村 好男

天の一角に悪魔の如き黒雲俄に起りて、空忽ちかき曇り、一陣の風さつと過ぎ、ピカリと光ると同時に、ごろ／＼と鳴り出して、間もなく大粒の雨ばら／＼と降り来る。折りしも霹靂耳をつんざ

き雨はさながら篠を束ねたるが如く、軒には早や瀧と落し、庭には見る間に浪を漲らす。隣りの婆さんは急いで着物を投げ入れ、二階の雨戸をばた／＼と閉さす。道行く人も大騒ぎにて、家の軒にはいつて雨の霽るゝを待つ。實に凄く天地も崩れんばかりなり、と思ふ程にはや夕陽の光まばゆく我が顔を照し、蝸やかましく鳴き出づ。夕立は實に凄く堂々たり。

夕立や河の向ふは日和傘

我家より望む

第一學年 原 一二三

早や太陽はさし昇り、朝顔はすばみかけた。白い蝶は垣にもたれて蜜を吸つて居る。竿に掛けられて居る浴衣に蜻蛉がとまると、側に居合せた少年が、それを見つけて、取らうと試みたが、頭をきよ／＼とさせて逃げてしまつた。はやくより小川の邊りに小蟬が鳴いて居た。二人の少年が、

蟬袋を持つてやつて来た。蟬は驚いたのか、鳴聲を一度にやめた。少年は永らく木を見つめて居たが、手にして居た蟬袋を木の側へあてると、「ヒ——」といつて逃げてしまつた。少年は勢ななさうな顔をして立歸つて來ると、蟬は楽しさうに音楽を初めた。

風雨の夜

第一學年 池上武夫

夕方からの雨は風まで加へて降りしきつた。どろどろと雨滴の落ちる音、じやあ／＼と板に當る音等其の物凄しい事、實に名状するを得ない。折しも西方よりふう／＼と言ふ音が聞えた。見れば一臺の自動車が、降り募る風雨と戦ひながら怪物の眼の如き二筋の光を暗黒の中に放ちふう／＼と呻りながら吹き込む雨を物ともせず凄じい音をたて、眼前を通過した。後は復眞の暗闇。それでも雨は静まらうともせず益々烈しく降りまざる。

度はひやりと僕の顔を撫でた、そして観音院の鐘の音と共に、日は全く暮れ果て、家々の電燈がきら／＼と輝いた。

夕立

第一學年 山根友信

遙か西南に當つて、怪物の様な黒雲が朦々と空一面に廣がつたかど見る間もなく、電光ヒカリと光つて、雷がゴロゴロと鳴り、猛虎のはゆる様で横さまに降りそそぐ。電光一閃、又一閃、雷鳴益々高く、雨愈々強く、その物凄さ、其の恐しき有様、たとへることが出来ない。

此の様にすること十分。忽ち雨霽れ、雷やみ、雲は散じて、光り輝く太陽がばつと光を放つた。涼風一陣、さつと青田の上に波をうたせていつた。

橋の夕

第一學年 藤田修郎

其の時東方からびかりと青白い光を放つた。と思ふと暫くしてころ／＼と言ふ遠雷の音が聞えて來た。凄しい風雨の此の夜に烈しい雷電までが加はつたら如何に物凄しい事だらう、と思ひつゝ床に就いて深い眠りに陥つた。

夏の夕

第一學年 齋藤秀夫

梅雨が晴れて、一月以上も経つのに、まだ一滴の雨も降らない、今日も寒暖計は九十度を越えて居た、後の波止場に出て見ると、堤際の木が、鏡の如き水面に映つて、まるで川の中にあるかと思はれる、堤の方から、鯛がやかましく啼き始めると、清く澄んだ馬子の唄が、川向の方に聞える、二三人の農夫は川下の方で、忙しさに鋤を洗つて居る、折から蘆から蘆へと吹き渡る風が、風鈴の短冊を動かして、涼しさうな清らかな音を出して居る。水面を蹴立て、やつて來た冷たい風は、今

鳥は「カア／＼」と啼へど急ぎ始めた。陽は早や西山に没し空は朱を流した様である。側の柳は時々思ひ出した様に、さら／＼と風に戦いで居る尺八の音がゆるやかに流れて聞える、橋の下を小舟が二三艘玉江の方へ下つた。向岸の家から談笑の聲がもれる、下の石垣から蟲の音楽が奏せられて一層涼しさを増す。子供が五六人橋のたもとに集つて、火花を上げてしきりに囃し立て、居る、空には二つ三つの星が淡い光をなげて居る、尺八の音はまだ澄んで聞える。

淋しき夜の思出で

第一學年 大村武一

夏の陽も西山に没し、朧月の光が静かに下界を照して居る。柱時計の報する音もなんとなく陰氣な、不安な思ひして床についた。時々父の呻く聲が聞える。やうやく夢路を辿らんとした、突然苦しげな呻き聲がしたはつと驚いて行つた。父の顔は

青く額には生汗がにじんで居た、僕の鼓動は秒秒に早つて行く、薄行燈の光も又一段悲しみをまじた、この悲しみをもしらす、すやくと夢路を辿つて居るものは妹だ、噫あの顔のいちらしさ、幼き時の事が思ひ出される、今は醫者も来てゐる。太い安心の息をついで戸口に出た、いつか雲散じて青白い光が唯萬物を照して居る。はや人通りも絶えた、蟲の聲のみ淋しくきこえてくる、あゝ、あの清き月よ。

母校

第二學年 野稻 清定

暑を冒して、僕は最も懐しい母校を訪れた。僕は毎日一つの石橋を渡つて、雨の日も、風の日も、こゝに通學したものだ。今では、運動場も廣まつたし、美しい花壇も出来て、此の二三年間に、見違へる程立派になつた。

北には、僕等がよく蕪取や茸狩りに行つた奥の

船と反對の方に向つて飛び行くのが見える。狭い内地にも住み飽いて、朝鮮にでも渡る氣だらう。暫くして、夜の幕が覆ひ懸り、暗黒の魔は、船にも海にもしがみ付いた。暗の中から、時々さつと閃く電光も、一層すこみを増す。遠い所で、底力のある様な雷の音がする。それでも、船は恐れる様な様子も無く、根氣よく、一時間、七哩半の速度で航り續けた。

夏の夕

第二學年 山根 信昌

疲れた夏の一日は、蝸の啼く音と共に暮れてしまつた。空には、可愛い星が、ダイヤモンドの様な黄金の光で、下界を照して居る。清い風が、浴衣の襟から心の奥まで沁みこぼる。足下から蟲の音が湧き出る様に聞える。青田の畦を歩いて見ると、まだ短い稲葉の末には、夜目にも著しい露が宿つて、其の間から、涼しい夕風も湧いて来る。

院の山が、手に取る様に眺められる。秋頃、奥の院嵐しの寒風が、窓の隙間から入つて、大變寒かつた事等を、夢の様に記憶して居る。

卒業記念に植えた櫻が、今は青葉を交へて蔭を成すまでになつて居る。懐しい舊師の影は見えぬが、目に映するすべては、懐舊の情を誘はぬものは無い。僕は、しばし校庭に立ちこまつた。

船中の記事

第二學年 中原 吉秋

釜山から朝鮮特有の禿山と別れて、もはや四時間も経つた。船は、今玄海灘の真中を、荒波と闘ひつ、航つて居る。今まで舷を噛んで居た浪は、益々激しく、今は碎けよとばかりにぶつ、かり、飛沫は甲板にまで散つて来る。此の邊は、玄海灘唯一の難所と言はれて居る所で、常陸丸の遭難も此の邊りださうな。荒れ狂ふ浪の音は、戦死者の憤怒の叫びかと思はれる。時に、二三羽の怪鳥が間もなく、田圃路を分けて川邊に出た。ゆる／＼と流れて居る。瑠璃の様な水面に、美しい螢の群が映つて、水底に星を流した様である。

墓 参

第二學年 松尾 政雄

淋しい盆が来た。家々には燈籠が懸けてあり、子供は提燈をつけて嬉しさに遊んで居る。私は親と墓参をした。縣道より一町餘り、赤土の道を上ると、頂上に古い墓が七八ある。これが、吾が祖先の方々の墓である。嗚呼此の墓こそ、吾家を擧げ私を中學校にまで入れて下された方である。そして、其の側に居れば、一生懸命勉強して家名を擧げよと言はれる様である。禿山の事であるから、暑いだらうと思つて、墓に水をかければ、じゆうんと鳴つて居る。何時しか陽は西山に没して道行く人も少くなり、線香の煙は濛々として、青き草の中より立つて居るのは、何となく物淋しい。

其の時梟がほうほうと悲しうに鳴いた。

友の信書を見て

第二學年 村木七郎

私が病氣で床に臥して居ると、突然「郵便」の聲がした。機械人形の如く、我を忘れ飛び起きて、受取つて見ると、親愛なる堀君よりの見舞状であつた。君は、暑中休暇の二三日後から、私と同じ運命の神に襲はれて、床に就いて居る、病氣の身のかなはないのにかゝはらず、私の事を氣にかけて、見舞状を出して呉れた事と思つて、私は、感極まつて泣いた。私も、君の運命には勿論同情に堪へない。私は、直ちに君の心を慰むべく返事を出した。私は、一生君の親切を忘れやうとは思はぬ。

汽船中の記

第二學年 平田清次

公德心に感心した。在郷軍人の肩書ある者が、其の位の事は、なすべきであるが、人の大勢居る中で、特に目立つて居た、他人の荷物を棚に上げてやつたり、自分の席を老人に與へ、「三田尻で急行と乗りかへるから」といつて立つて居る。老人等は、喜びて御禮をいひながら、腰をかける。一人の女が、あれを卸して下さいと頼めば、彼等は喜んでそれに應じる。私は、此の有様を見て感服するとともに、萩中の制帽を着けた身の、まだ之に及ばぬのが恥しい心持がした。

歸省途中

第二學年 木村輝房

餘り欲しくも無い飯を掻きこんで急いで家を出た。正に午前四時前十分。町には電燈がしめつた様に光つて居る。静かな夜明だ。何しろ十里餘りの道を歩むのだから、峠の坂道も無理野理急いで登つた。陽は未だ出て居ない。汗をふいて更にあ

懐しき、あの常夏の國を離れてから、もう二日目。最早島も何も見ぬ。たゞ廣き廣き海と空ばかりだ。歸臺の時よりは、波は稍高かつた。歌ふ人、ハーモニカを吹く人、面白さうに話す人、輪なげをする人、様々だ。「船が沈没したらどうだろう」など、不安の事も、時には考へる。晝食の鐘が鳴つた。皆それ／＼甲板から各々の室に歸る牛肉、胡瓜の膾、煮縮だ、皆旨さうに口中に入れてゐる。食事が済む。又甲板に上る。三時を知らずの鐘が鳴つた頃だつた。小さい船と行きぢがつた。「汽船だ、汽船だ」。うれしいものだ、弱つてゐる人も甲板に上つて来る、日は段々暮れて行く何も思はず一日の自然の景色に氣をとられてしまつた。

車中の記事

第二學年 脇本元

車中の私は三田尻驛手前に於て、或在郷軍人の

ゆみつゞけた。砂堂からは、なれた道だから自然氣が落付く。晝までは曇で涼しかつたがそろ／＼陽が照り初めて、耳の下を汗がぢり／＼流れる。併しいつもやすむ木の下だけは涼しかつた。四時頃には郷里に辿りついた。緑濃き枝垂柳の先の瓦屋根は樂しき我家の軒である。

吉田松陰

第二學年 小原美紀

二十一回猛士吉田松陰先生は、我が敬慕する一偉人なり。先生は長州萩の人なり。徳川幕府の末開國可否の論起りし時、窮に外國を視察せんとて安政元年、米船に搭乘せんとせしが、米人之を容れず。先生は自首して、獄に投せられたり。後一年にて出獄せしが、志士の就きて教を請ふもの、多くなりぬ。依りて、郷里萩松本村に松下村塾を開けり。維新の勤王家、此の塾より出づるもの多し。後幕府諸外國と條約を結ぶに至り、大いに憤

りて時勢論を著し、廷臣大原重徳に呈す。當時幕府老中間部詮勝、志士を捕へて、或は斬り或は流し、かば、先生は之を京都に要撃せんとす。安政六年捕へられ、遂に江戸小塚原の露と消えたり。嗚呼、松陰先生は、維新の基礎を作りし一人といふべし。

車中の記事

第二學年 黒磯 治夫

車室の内に腰を下した時には、もう汽車は徐々と動いてゐた。漸く安心した様な氣持であたりを見廻すと、餘り暇もない三等車室には、もう人で一杯になつてゐた。烏打帽の商人風の男や、眼鏡の紳士、學生、老若男女の入り亂れた顔、そはくしい旅行的氣分を涌き立たせる。重苦しい空氣に満ちた車内は、人々の語り合ふ雑音と、レールの軋る音とが相交つて、自ら軽い不安を抱かすのであつた。今度は目を窓外に轉じた。森や、川

不爲兒孫買美田の詩にても、彼の性格を知る事を得。嗚呼、此の英雄は、明治十年九月二十四日、城山の露と消えたり。

友の信書を見て

第二學年 増山 美雄

「それでは身體を大切に」と、互に別れの詞をかはせし日も、早や過ぎ、今は、八月半ばの午後なり。「郵便」の聲聞ゆれば、小さき妹は、早や書齋へ一葉の端書を持ち來りぬ。急ぎ手に取りて見れば是ぞ、友人某よりの便なり。時候の挨拶を書し、余の安否を尋ね、自分の無事なるを述べ、熱烈なる注意を加へ、最後に、親しき友の幸福を祈ると記しぬ、嗚呼此の人かくまで注意を加へ來れるか彼がいかに余を親友として交情を捧ぐるかと思へば、感涙に咽ばざるを得ず。

や、家が、どん／＼後に飛んで、走馬燈の様に忙しく映じた。刻々と近づきつゝ、ある故郷の山河が浮び出て、うれしく懐しい心持が、頻りと涌いて立つても坐つても居られない。何度も何度も、時計をのぞいて見た。

西郷隆盛

第二學年 宮崎 三郎

西郷隆盛は、文政十年十二月七日、薩州鹿兒島城下に生る。父を吉兵衛と稱し、彼の幼名を吉之助と呼ぶ。彼は、幼時より、膽力衆に勝れ、大事に臨みて驚かず。その態度堂々として眼光爛々炬の如く、威風人を壓するに足る。後十數年、江戸開城に際し、その氣宇廣闊海天の如くなるを見て、如何に、彼の人物の偉大なりしかを察せらるか、る偉人を出せるは、諸先輩の感化に由る所も多かるべく又一つは彼の天性にも由るべし。幾歴辛酸志始堅、丈夫玉碎耻概全、我家遺法人知否、

大海の旭日

第三學年 長濱 誠三

眠られぬ夜を淡い曉の光に誘はれて目を擦り乍ら甲板に上つた。東の空には樺色の色彩がぼんやり空一面に畫かれて居る。あゝ大海の日の出だ。旭日は徐ろに半ば海に現はれ遂に海より抜け出た。さつと閃く旭光は寸時僕の瞳を射た。するとかの姿は忽ち朦朧と白雲に隠れて了つた。見よ／＼、此の景を。雲は黄金色に縁取られ、恰も雲の彼方に光明の世界が開けた如く、其の美しき景には思はず僕を歎賞させた。併し旭日は刻一刻白雲を分け登りつゝ、遂に廣い蒼空に脱け出た。と同時に海上は茜色に染められた。さうして旭日は次第々々に薄絹を奄ひ被されて行くが如く、おぼろに霞み乍ら天空に昇つて行く。何時か起き出た甲板上の人々の口からは皆歎賞の言葉が洩れた。相變らず船は黃海を横斷して大連に向つて進んで行く。

魚釣り

第三學年 藤村 和 輔

滑らかな水に對岸の青葉は悠々と影を浸し、あ
るかなきかの流が、靜かに淀んでゐる。眩しい陽
は西に傾いて、白雲が只ぼんやり赤くならうとす
る時、釣が始められるのであつた。小さな波紋が
釣糸に湧いて、靜かにそれが擴がつて行くにつれ
誰も無言であつた。向岸の釣竿がひよいと上る。
軽い嫉を覺えて、直ぐ自分の浮標に目を落す、と
何時の間にか浮標は浮いたり、沈んだりして居
た。はつと思つて上げれば、もう餌は無くなつて
ゐる。ひよいと降す、小波が立つ、それも只の間
又浮標が手持無沙汰にぼんやりと浮いてゐる。對
岸の櫓の茂みがやうやく煙る時、思ひ出した様に
灯が、あちらこちらに點き始めた。

落日に對して

第三學年 波田 繁 夫

八月六日
若葉の上に朝陽がこぼれていともすが／＼しい
今日母と一緒に畑に草取りに行く。強烈な日光は
真面に降り注ぐ。暑い／＼、何と云つても堪へら
れない。夕方果しもなく續いたコバルト色の空
に、宵の明星がバツト輝いた。西空に見える夕焼
雲が美しい。

八月七日
美しい小鳥の聲に目覺める。明るい朝陽が壁の
隅から蚊帳に縋を作り、目に見ゆる程の塵埃が、
同じく縋に躍つてゐる。今日蔬菜畑に行つて見
た。西瓜が三つばかり、青く赤く光つてゐる。自
分の丹誠がこんな大きな塊になつたかと、叩いて
見て何となしに、ニッコリと微笑ますには居られ
なかつた。

海水浴

第三學年 有美 邊

酷熱其のまゝの結晶である八月の太陽は、ヒリ
／＼と頭の上で照つてゐる。雲といふ雲はなく、
二三片の白絹地の雲が空を走つてゐるのみだ。紺
碧の海を我が物顔に泳ぎ廻る銅色の人々、藍色の
鳥もあざやかに、帆一ぱい風を含んで走る白帆、
海鳥の群は低く波の上を飛び渡る。これ等夏の世
界の一場面。だかうした大自然を背景にして水泳
臺の上に立てば、暑いながらも膺心地のよい潮風
が遙に吹いて来る。ザブッ！ 身は海中めがけて
躍る。其の瞬間何の意識もなく浮び上つた時には
あたり一面泡で掩はれてゐる。思ひ切つて手を延
せば、寄せ来る波は後へ、體はスーと前へ進む。
涼しい風、冷い水、ほんとにいゝ氣持だ。赤銅
色に焼けたこの體は何となく末頼しく思はれ、こ
の胸で他日社會に乗り出す時を思へば、微笑せず
はに居られない。
再び水泳臺の上に立つた。

黎明の天空へ忽然として躍り出たあの輝やか
しい太陽を仰いだ時、世界の人々は如何に希望の瞳
を閃めかした事だらうが。人間ばかりでは無い、
宏大無邊な自然はどんなに感激に打たれた事か。
鳥は嬉々として新緑の梢に囀つて喜びの聲をあ
げ、塔燈と打寄せる海の波も勇み立つて居るの
であつた。
然し山寺の鐘聲に其の一日も暮れやうとする時、
朝の旭日は、夕の落陽と變り、靜かに大海原の果
に消ゆゆく光景は、實に莊嚴と悲痛の二字に盡さ
るばかりである。瞬へ急ぐ群鳥の聲が夕の空に澄
み渡り、渚の小波が夕の囁きを交す時、大自然は
靜かに夕の夢に入らんとするのである。
夕日は沈んだ。遂に沈んだ。淡紅い餘光も鮮やか
に。何時しか夕空には星の光が寂しくキラ／＼と
煌き始めた。

休暇日誌の一節

第三學年 末 益 清 介

落日に對して

第三學年 田村 義雄

劇しく照りつけて居た太陽は、段々西空に傾いて、平和な村は只半面のみを照されて居る。

飯炊く煙が縷々として立ち登る頃、陽は燦然たる金糸銀線を亂射しながら、今日一日最後の歴史を彩るべく、畢生の努力を試みて居るかの様に思はれた。段一段山の彼方へ沈んで行く。殘光も今は薄れ、恰も死に瀕した強者が寂滅の喘に弱く息づいて居るかの様だ。

噫、曾てはコルシカの一孤島より風雲に乗じて巨龍の太空に狂ふが如く、歐洲の天地を震撼聳動せしめ、一敗地に塗るや、セントヘレナの獄窓に憂悶幾旬、遂には再起の太志空しく消え果てた稀代の英雄大奈翁の末路が偲ばれて、無量の感慨に打たれるのであつた。

歸省

第三學年 岸 音熊

私の村の境を流れてゐる川迄來た時には、夏の陽は漸く傾いてゐた。學校から此處迄可成り長かつたが、左程苦痛ではなかつた。一學期の成績の思つたより良かつた事が、絶えず私の心を引き立て、早く此の成績を父母に見せたいなど、子供らしい心が自分にもかかしの程湧き立つのであつた。もう一歩で私の村だ。かう思ふと私の心にも體にも、何の力も無く倒れるやうに磧に腰を下した。今迄の忙しい心も消えて、温かい平和な氣分が私をうつとりさせた。絶え間なく吹くなま温かい風は懶さうに身邊に戦いて居る。私はばんやりと村の方を見た。赤土で造つた工事中の鐵道線路が、山蔭から緑の田の間を通つて、遠く南の方へ馳せ、夕陽がそれを赤々と照り付けてゐる。さうしてその上には二三人の土方らしい男が白いシャツを靡かしてゐた。「鐵道工事で亂暴な人があるかも知れぬから、歸る途中は能く氣を付けるやう

に。」かう云ふ手紙を三四日前に送つた父の顔が夢の様に浮んだ。

我里の夏

第三學年 波多野 公

今日も我は獨り暮れゆく阿武の河畔に歩を運べり。阿武の末流を、眞紅に彩りたる夕陽の稍薄らぐとともに、遠山の蒼色は刻一刻と黒味を帯び來り、夜の帳は我里に下され初めぬ。蝦取る童の姿も消え、牛飼へる乙女の姿も見えず。薄れゆく阿武の河畔は、實に静寂たり。麥藁焚く煙靜に昇り清流調の中に横り、製絲會社の煙突は巍然として中空に聳え、中津江の橋は無言の儘長し。鳥は打連れて畔へ急ぎ、可憐なる月見草は磧に微笑み初めぬ。暮色は目代の山々を巡り、大鼓灣を蔽ひ、上野を包みぬ。かくして我里は全く夜の帳に包まれぬ。願れば、今は山無く、橋無く、煙無く、唯對岸の家洩る燈火と、太空に瞬く星の影を見るの

み。

落日に對して

第三學年 大和 忠雄

今迄天空に覇を稱へて居た太陽も、今は早や山の端に沈まうとして居る。血を流した様な雲の間を、刻一刻と落ちて行くのを見ると、何となく寂寞の感に打たれ、孤城落日といふ悲壯な光景も胸に浮んで來る。今日一日は終つた。今日の日は未來永劫決して歸らないのだ。と言ふかの如く沈んで行く。恰度大英雄の最期を想はせる。殘光は一入然えて、その榮ある最期を飾るが如く遂に全く沈んでしまつた。私は悄然として只悲哀を感せずには居られなかつた。

眞紅に照り輝いて居た西の空が紫色となり、藍色となり、灰色と變つて、暮靄に包まれ、全く四面は模糊の裏に眠つて行くのだ。さうして叢に鳴く蟲の音が、太陽を弔ふ様に聞えて居る。

自警の辭

第四學年 横山 幸生

徒に過去の失敗を憂慮すること勿れ。これ現在の事業に夫れだけの停顿と遅延を齎すべければなり。蓋し之を反省し以て規戒となすに依りて、將來の完璧を期待せば、慰安となすに足らん。世に對し人に對し己に對し強者たれ。強き者は毀譽に依りて信條を枉げず。因襲に囚はれずして、革新を辭せず。感情の爲に理性を失はず。志す所必ず行ひ、行ふ所必ず成す。所謂「自ら反して縮くば千萬人と雖も吾往かん」底の、至剛至健の大丈夫たるなり。障碍の爲に辟易せず。適者生存も畢竟強者必勝に外ならず。

事件に逢着して之が判断決定を迅速に果斷に行へ。迅速と果斷とは機智と勇氣との發動に基く。因循は絶對禁物なり。世事推移水の如し。従つて其の處理益々急を要す。因循なる者は世の落伍者なり。右の條々立身處世の要訣、録して以て自ら警しむ。

男子の本領

第四學年 竹内 孝雄

予が曾て長門峽の絶景を觀て、深く腦裡に留めた印象は、彼の奇岩と戰つて奔流する水の、眞に男性的美景をなして居ることであつた。思ふに人の目的を達するまでには、幾多の困難に遭遇することがあるであらう。多數の大敵を引受けねばならぬこともあるであらう。この大敵を打破り、困難に耐へ忍んで、幸福の彼岸に達するのが男子の本領ではあるまいか。男子の本領は、活動力があると云ふことでなくてはならない。それは恰度、阿武川の水が中國山脈を突破して、長門峽の美景を作つたのと同じである。波瀾なく、奔湍なく、緩々と流れる水と、巖を穿ち、石を削り、幾多の障碍物に、當つては碎け、碎けては當る水と、どちらが趣があらうか。男子の本領は活動でなくてはならぬ。

我が郷土の人物

第四學年 河野 健夫

維新の英雄村田清風翁を生み出した澤江村、その澤江村上ヶ村から流れ出て、仙崎灣に入る一つの川がある。春は蹺蹺の繡、秋は黄葉の錦を水面に浮べて、右に曲り左に折り、淀みては淵となり走りては瀬となつて、長へに流れて居る。あ、懐しい澤江川。その澤江川に沿ふて清風翁の舊宅に達すべく、先年蜿蜒とした道路が出来た。今その新道路を上ると、上ヶ村の展開せられるところに近頃紅楓青松の枝を交錯せる公園が開かれた。その一段小高いところに、清風翁の石碑は聳わてをる。幅は一間に餘り、高さは丈餘の仙臺石である。あ、澤江川の流盡きざるが如く、この碑文は永く後世に傳はつて、翁の徳は郷人渴仰のオーソリチーとなり、園内の風趣四圍の光景と相俟つて長へに人心を感化することであらう。

旅行の趣味

第四學年 野村 久一

蜿蜒たる田舎道の、歩むに従ひ刻々に移り行く景色を味ひつゝ、友と語る時、旅趣は最も深し。旅は徒歩にて爲し、而かも一泊を旅宿に求めずして農家に乞ひ、若くは一夜と山寺の堂に明す。其の興味殊に深きを覺ゆ。質朴にして敦厚なる農家の主に迎へられ、幸にして一泊するを得んか。一見舊知の如く、爐を圍みて大聲に談話する時、ローマンチックなる興味躍々として身にせまるを覺えん。或は一小丘にかけ上り、地圖を擴げて不案内なる四邊の村落を見下す時、一躍天下を手中に收めし一代の英雄たる感あるべし。雨の一日を旅の宿に過すも、亦言ひ難き趣あり。

旅行の趣味

第四學年 倉重 達郎

旅行して見慣れぬ他郷に入り、其の風俗人情等を視察するときは、其の智識は、異日社會に雄飛健闘するに有力なる助けの一となるべし。

若しそれ、山紫水明なる靈境に到らんか。心も身も生れ出でたるそのまゝの赤裸々に歸り、我慾を捨て、鄙吝を洗ひて、遂に心は崇高なる自然に通ずるに至るべく、曠漠たる大海に臨まんか。齟齬たる塵の世の穢を忘れ、自ら大海の氣分に引き入れられて、廣潤なる氣宇頑丈なる體軀を作り得べし。

斯く論ずれば、其の旅行地は何處なりとも、一として趣味あらざるなく、眞に旅行は心身を修養する一手段となるべし。吾人は須らく大に旅行に興味を持つべきなり。

旅行の趣味

第四學年 福島 皓一

陸に海に、交通機關の發達せる現今の旅行に於

珠をなす。枕を敲て、眠らんと欲すれども、夢結び難し。乃ち「英文の解釋」を手にし、海邊の樹蔭に身を投ず。涼風吹き來りて袂に滿ち、精神爽快なるを覺ゆ、始めて蘇生の感を爲す。是に於てか讀書すること久しくす。風來る毎に小枝を叩き葉を漏るゝ光強く紙上に反射す。暫くにして陽樹上を越え全身を照らす。乃ち身を他の樹蔭に避けんとすれば、時已に六時を報す。此の間二十有餘頁を讀み、毫も時の去るを覺えず。余休暇中讀書すること一時間半を過ぐる事なし。然るに今三時間過ぎて始めて止む。實に數年來のレコード破りなり。蓋し此の日を有益に送らしめしは實に綠蔭の賜なり。

綠蔭書を讀む

第四學年 山本 浩

今日は少しく頭痛がして、陰氣な室内ではとても勉強が出来ない。そこで一冊の書物を手にして

ては、昔年の旅の困難は想像もつかないことであるが、今日にても崎嶇たる山間を經涉し、世に隱れた山水の景勝を探ることは、何人も禁じ得ない快感であらう。又一氣千里を驅り、朝には温い南國の大氣に浸り、夕には冷き北國の土を踏む時に誰か感慨無量の念に滿されぬ者があらうか。斯の如き事は、旅行によつて始めて味ひ得らるべき興味である。書を披見し精細なる地圖を開くことも、實地踏査しなければ、其の興味は半減するであらう。吾人はこゝに我が全國は難しと雖も、凡そ我が縣内郡内には、自己の足跡を印せんと努めてゐる。彼の健全なる身體を作り、剛毅の精神を涵養するは、一に旅行に負ふ所が多いのである。是に於てか、吾人は大に旅行の趣味を養ふべきである。

綠蔭書を讀む

第四學年 兼田 功

風死し草木眠るが如し。炎暑甚しく、汗流れて

海岸の松原さしてやつて來た。一本の松の根方に腰を下し、持參の書に目を放つ。松は綠滴る葉を以て、さしにも鋭い日光の直射を防ぎ止め、遙か彼方より海上をかすめて來る涼風は、我が身邊を訪づれては去り、去つては又訪づれる、かくして此の盛夏の候にも拘らず、少しの倦怠も、睡けも起らず、實に氣持よく讀書が出来た。故に平生は日課として居る十頁を讀むにも、長い時間を要するの、今はいつしか十二三頁を讀み終つた。其の上頭の痛いのも忘れ九如くに癒えた。あゝ綠蔭に書を讀むは實に氣持のよいものである。

綠蔭にて書を讀む

第四學年 内田 益夫

静かな處で、獨りと云ふ自由な氣持になつて、心から讀書して見たいと思つた。盛夏の一日、近くの鎮守の森にと暑を避けた。此處は樹木鬱蒼として誠に自然な所だ。蝸が頻りに鳴いて居る。自

分はやをら小祠の石壇に腰を下し、詩集を出して讀んだ。自分を束縛するものは何物もない。頁を次へ次へとめくつて、或る時は感嘆し、或る時は悲哀し、又或る時は同情して、自由に讀み續けた。蠅が又一しきり鳴いた。日はすでに山の端に沈まんとして居るのに、初めて氣が附いた。今日程自己を忘れたことはない。自由な半日であつた。何時までも此の儘靜かにして居たい様な氣がした。又一しきり蠅が山の沈黙を破つて鳴いた。

修學旅行記の一節

第四學年 小方 數馬

あたりはもう薄暗くなつた。遙か向ふの山の麓の農家の灯が瞬いて居る。……

汽車は今小さな停車場についた。「坊中、坊中」と淋し氣に呼びつゝ、過ぎる驛員の聲が、列車の後方に消える。朝から汽車にゆられ通したので、喧しい程がや／＼いつて居た友達も、皆ムツチリと黙

りこんだ。淡い旅愁といふ様な感が追つて来る。——汽車中にて——
むく／＼と煙の出で居るのは、つい鼻の先であるが、一山越せば又煙は向ふの山から出て居る。一面の熔岩で草すら生えて居ない所を靴で上るのだから、甚だ疲れる。風の工合で時々硫黄の臭が鼻をつく。一同は黙々として今は軍歌を歌ふ元氣もない。と谷を隔て、遙か向ふの頂で、豆の様なのが兩手を舉げて叫んで居る。飛んで行きたい。

——阿蘇登山——

修學旅行記の一節

第四學年 三原 清治

八幡のあたりでは、もう日が暮れてゐて、鎔鑪爐が、火車かのように空にはてつて、物凄く見えた。汽車は雨の中を門司へ門司へと進んで行く。

雨の夜のステーションは寂しかった。ブラットホームに立つた驛夫の呼ぶ驛の名、その中には何と

も言はれない旅の情調が籠つて居た。

門司門司と呼ぶ聲に、皆は下車して連絡船へと乗り換へた。雨の夜の關門海峡、何と言ふよい景色だらう。夜泊して居る汽船の舷外に洩れる燈火はるかに見ゆる下關の燈光の水に映つてゐる景色。不意に鳴り響く悲しさうな汽笛の音。

我が心は詩的な景と趣きとで一杯になつてゐた。しかし斯くの如き脱俗の氣分は長くは續かなかつた。僅か十五分で我々を乗せた賑かな連絡船は、彼岸の下關に到着した。

男性美

第五學年 杉 丙三

偉大なる彼の體軀——幅廣き彼の肩——美しき皮膚の光澤——圓々たる肉瘤——筋肉の波——おゝそれらは彼の男性美を構成する貴き要素。さて彼の體はミケランゼエロの作か、ロダンの作か否々。ミケランゼエロの作でもロダンの作でもな

男性美

第五學年 弘中 勝

男性的美は男性が纏ふ衣服に依る美でもなく、其の内體に施したる裝飾の美でもない。一人の男が全裸體で此の世界に投げ出された時、其の男の有する肉體の美と、精神の美とを云ふのである。あの草原の中に聳ゆる一本の松の、春夏秋冬變る事なき緑の葉が、行き惱める旅人を其の蔭に憩

せ、疲れたる鳥を其の懷に抱くが如き大なる慈愛を有し、正を見る時は、大木の微風にも靡くが如く、弱者にも順ひ、悪と思ふ時は、強木の大風に抗して屈せざるが如く、己の肉體と精神との全力を盡して戦つて斃れて後已む。

あらゆる困苦と戦ひて屈せざる偉大なる肉體と、富貴名利の爲に迷はず、強者に屈せず、弱者を慢らざる精神とを合せて眞の男性美と云ふのである。

都會と田舎

第五學年 田原節夫

田舎「僕は複雑と變化とに富んだ、さうして元氣のいゝ君の生活が羨しくてならない。」

都會「それは違ふ。混濁し切つた空氣の中で騒音を聞いて暮す僕が何で楽しからう。僕こそ君のさうした單調な生活が羨しくてならないのだ。」

田舎「いやその生活がいけないのだ。そこには

生氣と充實とがすつかり失せてしまつて、只空虚と倦怠とが残つて許りなのだ。それでどうして生の歡喜が求められやう。」

都會「さうして無爲に暮して行くことが一等幸福なのだ。——變化は苦惱を意味する。苦しみを脱せんが爲に様々に生活が變化して行く。しかも變れば變る程愈々苦惱と疲勞と頽廢とが嵩じて來る。それが僕の世界の狀態なのだ。總てが嫌惡の中の生活なのだ。——」

都會と田舎

第五學年 柏村正

インディエーのぼつちよりと、稍々多量のブラツクとホワイトとを、油でこきませて描いた波は都會だ。青ざめた帽子をかぶり、自然からも、精神からも、虐げつくされた髪をなびかせて、煤烟と埃に染まつた肩をすぼめ、昏迷の迷宮のぐるりを、幾度もく廻つてゐるのが都會人だ。だが、そ

こにわたくしは言ひ知れぬ寂しさと愛着とを感ずる。汲めども盡さない情感を知り、その奥底に永劫の神祕の眠るを見る。愛憎、悲喜、美醜、總ての愛慾の動搖がある。純朴そのまゝの美、それは草深い田舎の自然だ。そこでは天と地との間に育めるすべての物が、何物にも犯される事なく、あるがまゝに輝いて居り、あらゆるもの、純な生命が融け合つて居る。そこでは人間は人間として美しいのだ。

機械の力と人の力

第五學年 惠美須屋三吉

吾人は自由に働かし得る手を持つ。此の手ありてこそ吾人は始めて經濟的發達の根本動力たるかの道具を作り得るなれ。されば手もて人を代表せんとす。相手、騎手、選手などいふは即ち之なり。目に見、耳に聞くも、見手聞手などいふ。其の手の延長が即ち道具にして、道具の精巧なるものが

即ち機械なり。道具は單に人力の補助を爲すに過ぎざれど、機械は之と異り、謂はゞ自動的道具なり。晝夜の別なく獨りからく動く時計の如きは、小規模の機械の一例なり。即ち機械は自動的なり。されば一度之を貨物の生産に應用せば、吾人は別に勞苦に服せずして、容易に物資の豊富なる供給を得らる。西洋の經濟が著しく發達せしも皆機械の力なり。

機械の力と人の力

第五學年 福田幹雄

ふと線路上に目を向けた。其處には遑しい大の男が鶴嘴に全力を打ちこんで、この炎天に汗を流して働いて居た。これをかの一時間數十哩を走る機關車に比すると、人の腕の力は餘りに小さい。殆んど零に等しい。が然し、機關車の運轉するのこの微々たる人力の結晶より生じたことを考へれば、人の力は機械の力以上ではあるまいか。人

あつて初めて機械も用をなすのである。人あつてこそ之を利用し、初めて功を奏するのである。丁度かの一打一打が自然を征服する様に、少しづつ且つ堅實に。

機械の力と人の力

第五學年 藤成一雄

機械の力と人の力と言ふ語は、我等に象と蚤と言つた様な感と興へる。それはあの非常に強い機械の力と、米一俵さへも自由に運搬する事の出来ない人の力とを比較して考へるからである。然し精しく考へて見ると、人の力と言ふことを、人の體力そのものと思考するのは、少し輕卒な考ではあるまいかと思ふ。體力そのものゝ意味ではなくて、人類の生命とも言ふべき無限の智力、之を人の力と言ふのではあるまいか。果してさうであるとすれば、機械は人の力の具體化した一例に過ぎない。機械は人の力の産物である。人が此の産物

を利用して、莫大な力を生せしめ、著しい能率を收めて、生活の便に具へ、遂には自然さへも征服せんとする點に於て、人の力は一層の光彩を放つものである。

過去と未來

第五學年 追山六郎

一刻を以て現在とするか、又一生を以て現在とするか、兎に角現在以前を過去と云ひ、以後は未來と云ふ。過去と未來との境が現在で、現在の推移に依つて過去と未來とは生するのである。佛家は一生を以て現在の意にとり、生前を過去、死後を未來として、過去の一定の運命に依つて現在の運命が支配され、又現在の行爲に依つて未來の樂境が開かれると説いて居る。我々は過去の天運はどうする事も出来ない、現在の状態に甘んずる事に依つて過去の幸運を知るのである。然し未來の幸運は現在の状態に甘んじて居る事に依つて得る理解するに依つて得らるゝ事を知るのである。

都の友に

第五學年 長嶺正博

來給へと云つたどて御承知の通りの田舎町、別に公園とても無ければ、銀座見たいな所も無い。だから面白くもあるまいが、又好い事もあらうと思ふからは非來給へ。東京見たいな所で頭から塵を浴びながら、朝から晩までチンとして居る君だから、偶には青葉薫る田舎に遊ぶのも氣晴になるだらう。公園より何より青い海、白い浪、白砂青松の濱……。涼しい松蔭の下に寝轉んで、鷗の歌なりと聞いて居る方がいくら楽しいか知れないと思ふ。論より證據まあ來て見給へ。海水浴でも御望み次第だ。東京附近の海岸は萩の新堀川の様、なその中で願いで居るのが氣が知れんよ。菊ヶ濱は砂地だから氣持がよい。

まだ、面白い御話もあるが、今皆云つて仕舞つては、それだけ聞けば行つたも同然だ。はい御

られるものではない。善に向つてあらん限りの努力を盡し、現在の不運を開拓して歡樂境を作成すべきである。

過去と未來

第五學年 上村義男

自己は自己の全力を盡す事に依つて、自己の價値を自己が知る事が出来る。そこに言ふべからざる欣懐があり、光輝があり、更に希望が湧くといふ理は兒童すらも辨へるに苦しくは無い。然れば我等青年は一步進んで考慮する必要がある。

自らその缺陷を覺知せぬ社會程危いものはない。自覺せぬ個人程その身の危険なものはない。即ち過去反省が必要となる。上を見るな下を見よの封建時代の道徳を脱して、上下を對照してこそ世の達觀も出來得るのである。と同様に過去反省と共に將來を慮らねばならぬ事は言をまたぬ。是に於て個性充實進んでは個性の發展も期し居る。故に希望を満足せしむる成功は、過去と將來と

苦勞様、有難うとやられると大變だから此のくらゐで置いて置く。まあ來て見給へ。憂鬱病忽ち癒る事受合だ。失敬

都の友に

第五學年 吉村 恒助

丁君、先日はお便り有難う。この炎天にも拘らず、毎日勞働——都下の道路修繕——に精を出される由、實に苦しいだらうと遙かにお察しする。然し、どかく身神共に怠惰に、平凡に過し易いこの休みを、そんな方面に利用するのは、最も有効ない、事と思ふ。僕も其の意味に於て、友人と田舎の小學校で自炊をやつてゐる、毎日のプログラムを作つて、其の通りに規則正しい生活を續けてゐる。なか／＼面倒な事もあるが、其の中にもまた言ひ得られぬ面白味がある。とにかくお互に、比較的有効に、この休みを利用しつゝあることを祝し、其の成功するのを祈つて、こゝに筆を擱く。益々御自重あれ。

舊友

第五學年 三輪 茂

僕の友人には小學校を卒へたばかりで、實社會に飛び込み、單調な農夫生活をして居る者が大部分で、勇壯な漁夫と成つた者も數名ある。彼等は今では村の中堅として日夜活動を續け、立派な青年と成つて居る。僕は遊學の身であるから、彼等と會ふ機會は滅多に無い。休暇中育て上げられたる母校の田舎に歸つて見ると、多くて二三回遇ふ位で、従つて彼等との交際は極く淡い。境遇の相違か、思想の懸隔か知らないが、彼等に出遇つても語る材料が無い。

昔は呼び捨てに相互の姓を呼んで居たのが、今では、君を付けて他人行儀と改まつた。斯くして彼等とは次第に未知の人であるかの様になつて行くかと思ふと聊か心細い。

英文

HANAKO AND THE MORNING-GLORIES

By Shozo Kawamura, 3:1.

One morning Hanako got up earlier than her use and strolled out into the fields. There she saw a large number of pretty morning-glories in full bloom. "Oh! How beautiful they are!", exclaimed Hanako. And just then a lot of children of morning-glores in their best appeared in a body she knew not whence. Presently they flocked cheerfully round her and greeted her with "Good morning." They took her hands and entertained her to sweet songs and lively dances. The little girl was transported with delight.

After a while when she came to herself she

found no trace of the charming elves who had been with her just a moment before.

There came three friends of hers and seeing her, said, "Let us pluck the morning-glories, Haachan, and play at house-keeping." Hanako was not a little astonished and said, "No, no! It would be too cruel to do so. If we pluck the morning-glories they will fade at once. So we had better look at the blooming flowers as they are. See! How pretty they look!"

At this all her play-mates were brought to their sense and promised her that they should never commit such an unfeeling act again. Then the children of morning-glories presented themselves once more, and cordially invited Hanako and her friends to their beautiful palace. And there the little girls were treated to strange stories and sweet music. In a big fine room they danced to the music all together hand in hand and had a good time for the rest of the morning.

TRANQUILITY OF HAGI

By Seiji Mihara, 4:2

One summer afternoon I alone visited the birth place of Shoin-sensei that lies on the west side of a small mountain situated to the east of Hagi-machi. There we can command a fine view looking down all the town from side to side. It was very fine and quiet. The sun was just going to set in the western sea and the sunshine was reflected on the Hashimoto and Matsumoto rivers which ran like so many golden ribbons through the outskirts. The clouds around the sun were tinged gloriously and the rays emitted through them shone on the roofs all and coloured the upper half of trees which dotted here and there in the town. What a fine view it was! I can now well remember myself enjoying the lovely scenery standing at the foot of a monument for his birth place. The sun at last has set and the glorious sight has gradually

disappeared in a grey twilight. Thin vapour rises from the foot of the mountains surrounding the north of the town and gently proceeds towards the south, first crossing the river Hashimoto and then spreading all over the houses, trees and all. From the kitchen chimneys, light smoke has already begun to curl up into a quiet air. It grows darker and darker. Just on the opposite of us, Mt. Shizuki independently stands high in the dusky sky like a giant but somewhat lonely. All at once a sharp shrill sound of a steam pipe breaks the tranquillity. After a little while, lights are turned on here and there as if they were a night's decoration of the town, while in the sky the stars commence to shine as if responding to the lights below. By this time all has been silent and quiet and dark about me on the mountain: my heart is made easy and light full of peace-loving joy. Sleep peacefully, Noble Hagi-machi!

THE GREAT QUAKE AND ITS INSTRUCTION

By Kosei Yokoyama, 4:1

On September 1 a great earthquake was suddenly experienced in Kanto. The quake was instantly followed by big fires which started at several places in Tokyo and Yokohama. The city of Tokyo, the greatest one in the Orient, the center of our Empire's politics, economy, education, art, etc. and Yokohama, the most prosperous trading port of Japan were both reduced to ashes in a single day. Millions of houses were destroyed and thousands of people were burnt to death. The miserable condition is said to have been beyond description and imagination. When we were brought face to face with such a great destruction, we could not but think that science in these civilized days is no match for the power of Great Nature. Every nation throughout the world expressed

her deep sympathy towards Japan and began the relief work directly she was informed of the disaster. We ought to offer them sincere thanks for their noble work of relief and consolation, and at the same time we must work hard in reconstructing the capital and restoring other devastated matters to the former or better state, which the world expects to be completed in the short future. This horrible destruction may be taken as a warning given to our nation from Heaven. This I dare say from a fact that their moral sense seems of late to have disappeared out of their mind and instead of this a desire for luxury or to get much money with little work has occupied their mind and ruled their life. Let me here relate an instance; among the great buildings destroyed by this shock there have been reported several scandals concerning the way of construction. On the other hand, even a brick building faithfully built-up has survived this great devastation.

If this way of thinking and doing should continue, I am afraid, the fate of our Empire whose nationality we have been very proud of from our ancestors, would surely come to ruin.

Hereupon I must declare that all our nation, young and old, men and women, officials and nonofficials should come to their true senses and strictly keeping to justice, endeavour to maintain our noble nationality forever. If the people awake to this and do the work in their own line we need not at all lament over the damage caused by the shock and fire, though it was the greatest one that has ever known to mankind. To do this is also our duty to the nations of the world who have done much in the relief work showing deep sympathy with us in calamity.

In particular, young men, who must bear on their shoulders the destiny of the Empire, should bear this in mind and always be true and faithful to thier duties.

Do not forget the first day of September 1923 and remember the warning given to our nation by Providence.

Choice of Companions

By Tomoichi Okada, 5:1

Nothing is more important than the choice of companions in our social life, especially so for us young men. If we associate with good friends, we shall surely be inspired by their wisdom and character mentally and morally. If, on the contrary, our friends are bad, we shall unconsciously be degenerated step by step by their bad examples. It is truly said that he who touches pitch shall be defiled therewith.

I remember a story of a young man told by my mother. She said, "I know a young man who is the only son of old parents living in Matsumoto,

He was very clever in his primary school days, and was much beloved for his gentle and kind manners as well as his constant diligence, enjoying the confidence of his teachers, and the respect and good wishes of all those who knew him. When

he was in the fourth year class of a certain middle school in Yamaguchi, he fell into bad company. He was not fortunate enough to have such good friends as to warn him of the danger into which he was about to fall. It was long concealed from his teachers and parents, until it reached the latter's ears at last. He was at once dismissed from the middle school, and inflicted a deep wound upon the heart of his poor parents. How deplorable it is that he should have at last been corrupted by his evil friends! My dear Tomoichi, if you want to be successful in life, you should be careful in the choice of your friends."

I was much impressed on my mind at this tale. I dare say this is only one among many

instances of young men who were ruined only because of their keeping company with bad friends. So we young men ought to shun vicious friends and associate with good companions.

MAN AND MACHINERY

By Sugi Heizo, 5:1

In the primitive ages, our forefathers depended solely upon the muscular power to support themselves, because their way of living was so simple. However, as the result of the increase in population, the growing complexity of society, and the progress of the world, man's ever-increasing desires could not be satisfied with man power so limited. It is quite natural that man should have been compelled by necessity to seek for some substitute for physical labour.

Machinery made its appearance then. It is

indeed one of the most important products that were brought about through the transition of ages. Man could apply his power thus saved to nobler intellectual fields of activity. The consequence was that all the more the world advanced in civilization with great strides, and again this striking progress accelerated many great inventions of machinery.

Above all the Industrial Revolution in the nineteenth century marked a turning point in this direction. The great inventions of the steam engine and spinning machine and many others have brought on the development of mechanical work until it has come to make an epoch of so called "Machinery is everything" as we are in now.

Hundreds of cotton yarn are turned out by the feeble hands of women. Canned beefs manufactured by the power of machinery, when a man takes a cow to a room of mechanical work. Even in agriculture which seems to be in the most rudimentary and primitive stage, the power of

machinery is driving away man power.

Machinery is not only indispensable to all necessities of life, but also it is serviceable in various works of more exquisite and delicate nature—for instance, the wire as well as the wireless telegraph that serves us in delivering our intention quickly to distant lands, the phonograph that records our voices forever, and the cinematograph that reproduces our actual movements on the screen.

On the other hand, however, the remarkable advancement of mechanical industry wrought a complete change in social organization. Some capitalists or employers are ever busy swelling their pockets by availing themselves of the power of machinery, and treat labourers and employees as if they were appurtenances of machinery. But labourers are not senseless implements, but intellectual human beings. Then both employers and employees are antagonistic to each other, and there arises socialism.

It is out of question, I presume, that as machinery has been made by man with a view to assisting him, it must be absolutely subordinate to man. Whether or no the relation between man

and machinery is well understood and the maximum efficiency to take the best advantage of machinery is attained, is a great serious question to come from the view-points of social politics and economics.

At any rate, machinery is everything nowadays.

And the spheres of invention and application of machinery is still boundless. So without being satisfied with the present state, we should do our best all the more in the interest of the two ways above mentioned, for we must not consume our energy on physical labour, but direct it to brain work. If the machine wear out in half the present normal span of time the world would be much richer, but on the contrary if man wear out in half the time, the world would be still poorer, and this needs no demonstration. I believe it must be

the machine and not man that is to sweat, and this is nothing but the way to the promotion of the welfare of mankind.



卒業生通信

神戸高商より

同校 神田壽治

原稿用紙を手にして萩の天地が一入慕しくなつた。東京の大震災を聞いて、益々彼の自然の儘に残された假令それが文化的施設に遅れて居るにしても萩は平和な天地だ。指月山下の學園は確に自然の恩恵に浴して居ると、意識せずには居られない。

然し如何なる自然の悪戯の爲にも、決して吾々の究極に對する敬虔な思慕の情は變るものでない。吾々が現實に生きて、審かにそのありの儘の姿を見るとき、そこに完全無缺なものを見出し得ない悲哀を感ずる。然し究極への理想を求むる事は人類の使命である。

都會の中學生が忠實だと云へば、萩の中學生は元

同校 内藤 野村 孝貫 之 有田 勝正

水々しい青葉の緑が天地を覆ひ、蟬の聲が其の間から聞える。これ四圍の青葉が大氣を吸ひ、張り切る様な樹の幹が刻々太つて行く響であり、澄み渡る夏の表微でせう。然し最早や秋も訪れて野にも山にも紅葉の美しい幕を引き、無心の虫も時を忘れずに鳴き交ふ頃とはなつたのであります。かく自然は諧律的に進んで行きます。その下に微弱な人間は右往左往とあせるのであります。種々な俗事が奔發します。然し吾々は之に辟易してはなりません。遠き彼方の理想に向ひ、眞面目な發達を遂ぐべきであると思ひます。目前の小事に拘泥せず、懊惱せず、人間のおせる束の間も依然として進み行く自然の如き態度が吾人の上に望ましいのです。男々しくも痛しい入學試験も追々近づいて來ます。然し現今の制度では之を越さねばならぬ道中の坂とも云ふべきであり、誰しも一度は経験せねばならぬ苦痛ではあるまいでせうか。果

氣だと云ひたい。確に都會の中學生は周圍の事情の爲に、自己を意識して居るかも知れぬが、器量がないと同様に、萩の中學生には緊張味がない、呑氣だとも云へる。

入學試験の制度は確かに悪いが、然し是より立派な制度が発見されるまでは、當然その存在は許さなければならぬ。理想を追求すると同時に、強く現實を意識せねばならぬ。空論は扱て置きパスする爲に最善の努力を致すべきだ。

學問の應用と、體力の養生と、道徳の修養とは本校の三綱領だ。實務の人を養成するのを目的としてゐる。校舎は木造で、貧弱だが、位置は扇港を一眸に入れる絶好の場所だ。萩中の同窓生は市川三戸、藤出、瀧口の諸兄が居られる。

山口高等學校より

して然らば是に向つて猛進するのが眞の男子ではありますまいか。我山高は鴻南の地に位する、萩地に劣らぬ閑靜の地に存する學びの園で、後方の鴻の峯より吹き下す風、傳説の巫山の神秘的な影頂上に突き立つて群山を眼下に眺めつゝ、曠くに足る鳳凰山、是等は皆前途有爲な諸君を心から喜んで歓迎します。のみならず、我校には萩中出身者が二十名ばかりも居りますので、甚だ氣強く、又互に眞情が溢れてゐます。試験準備について一言しますと、参考書はあまり幾冊もやる必要はありません。英語と數學を一冊づつ位、他は學校の教科書及参考書を充分にやればよいでせう。然し暗記物は決して輕視してはなりません。國語漢文の答案には普通用ひる言語、或は言ひ換へれば却つて文章が複雑になるやうな場合は、そのまゝ書いて置く方がよいやうです。勿論何れの答案も丁寧に書いて、一目瞭然たらしめなければなりません。場合が多いやうです。特に容易な問題程人も書くので、其の必要がありません。諸君が山高を志願されて、山口にお出での節は、是非吾々に宿所を

御知らせ下さい。萬事好都合なことが多からうと思ひます。又定つた宿所の無い方は早くから御知らせになれば、大概は寮とか或は寮中出身者の居る下宿とかで泊れる所を御世話します。尙試験のことで不明の點があれば御用捨なく御問合せ下さい。出来るだけ御盡力します。

明專より

同校 宮國秀彦

校友會雜誌第二十一號に次いで、又なつかしい皆様に拙いペンを走らせることになりました。先輩としての私から、本校の内情や入學試験に就いての所感や重複する處があり、こゝでは是非とも皆様の前に腹藏なき所感を披瀝して、出来ることなら御了解を得たいものと望みます。近年高等専門學校の増設に伴ひ、高校の入試の如き、四年卒業程度で應せられると云ふことの爲めに、優良分子は専門學校を望まないで、専門學校も四年修

了の程度でやりたいと云ふ有力なる説が識者間にもち上つたけれども、當局の認る所とならなかつた。以前は高校に入學するのが至難であつたと言ふのは、結局立體幾何や三角があつたからのことで、今日色んな方面から見ても高校に入學した者が必ずしも優良分子であるとは私には信ぜられぬ要は受験する者の決心一つと思ふ。

明專は今から約十六年前、北九州に呱呱の聲を擧げた。松青き中原海岸に立つて、水や空なる玄海の海原や、關門に出没する白帆を手取るやうに望むことや、名だゝる製鐵所の黒煙が背後の山一つを隔て、宙に舞うてゐることが、何より大自

然のギフトと思ふ——自然が明專を設けしめたる所以は實にこゝに基因する。
大正十年大戦の影響は惜しげもなく明專をして政府に獻納せしめた。明專の維持費は政府から四分と、資金參百萬圓の利子六分とで支出してゐる。母校から入學者が何故少いだらうか——官立に變更されたからとて教育方針の異なる事は斷じてあり得ない。明專は自由の天地である。高らかに自由

を呼ぶものゝ來るべき天地だらう。

明專の敷地は廣大である。試みに正門より南して進むとせんか。兩側に松並木を見て學寮に通ずる限りなき通路がある。ユーカリの高く聳えた葉蔭に、赤い煉瓦建の建物がチラ／＼隠見する様ばまるでパノラマのやうだ。
時代は工業だ。そしてエンヂニアの必要は益々激増しつゝある。此の時に際して奥底あるエンヂニアを必要とすることは偶然ではないと思ふ。切に、切に。

月があがつた——の帆柱山の頂さを匍ふやうにして。どこからか寮歌が洩れて來る。

帆柱山に月落ちて 曉近く蟲の聲

文讀む身にも泌み渡る 故里遠く離るれど

心は強し友四百

(一九二三・九・一六)

福岡高校より

同校 小川 薫

福岡城趾、今の第二十四聯隊と練兵場を距て、相對したる校舎が、昨年新設せられたる我福岡高等學校に御座候。未だ創設以來一年有餘、生徒數も來年度の入學にて充實致すべく、校舎の設備も此程漸く整ひたる有様に御座候。乍然場所は街の塵を離れたる閑散の地、教授法も可なり親切にて勉學には申分無之と存候。尙大學も當地を轉せずして進む事を得、且秋にも比較的近き地に候へば明年は多數本校受験者諸兄のあらん事を希望仕候唯今の處母校よりは小生唯一人に候へば、若し在校生諸君にして當校内容等に就きて知りたき方御座候は、御遠慮なく小生宛御紹介下さらば幸甚に存候。終に臨み諸先生並に在校生諸君の御健在を祈申候。

東京高師より

同校 鳥居 勝

本校は幸に空前の大破壊から免れました。猶昇格案もパス致しました。來年入學する者は先づ第一に其の恩恵に浴する事と思ひます。生徒の氣風は一般に温和であります。先生と生徒の間には何等隔が無く親密であります。入學までに御参考になることは

一、科の撰擇 自分の趣味のある得意な所に向ふが第一です。然し生きて行く爲めには身體と言ふ事を忘却する事は出来ません。理科の第一部及第二部は平時に於ても可成頑張らなければなりません。仍つて運動及び睡眠不足に耐へ得る身體を要します。特に薦めたいのは體育科の甲(體操競技を主とするもの)であります。近時運動競技の熱が次第に高まりつゝありますので、此の科の生徒は生徒時代も卒業後も夏休み中は方々にコーチに招かれます。高師の競技部と言へば本年の極

東オリソピック大會の成績を見ても實に目醒ましいものです。五種競技及び槍投に優勝し、攝政宮

カッパを賜つた上田精一氏を始めとし、納戸、佐藤、鴻澤、其の他多數の生徒が在學中に於て既に名聲を博したものがあります。

一、入學試験 科目は多い様ですが、相當に眞面目にやつて置けば大丈夫です。問題の傾向は一般より出ますから、全部目を通して置かねばなりません。淺くとも廣く、正確に。數學物理はどこまでもロソカリーに。博物は本校の過去に出た問題が殆ど必ず出ます。

一、口頭試問「學資金について」「入學志望理由」等を質問せられます。實に平凡です。

一、體格検査 萩中學校入學試験の時に全く同じです。

一、學資金 入學の月が百五拾圓位。普通の月が四拾圓内外(私費)。給費生を出願すれば貳拾五圓の給費があります。但し義務年限六ヶ年、私費ならば二ヶ年。多數御入學の程切望してやみません。

同志社高商より

同校 岩田 芳夫

四神相應、山紫水明、京都は東都の廣大、混華の般賑に比ぶべきものは無いけれども、その靜寂さが眞に學校の存在をして有意義ならしめてゐる同志社は明治十六年の創立で、歴史は古い。舊御所と有名な相國寺との間に、廣濶な地を占め、校舎の美麗なる事は全國のあらゆる學校に卓越して居よう。附近は割合に靜かで、勉強と運動には好適な地であらう。僕の通學してゐるのは高商部である。元來本校は精神教育と英語に對して最も意を用ひ、隨つて英語は可成り鍛えられる。眞に英語を學ばんとする士は來る可しである。本高商の創立は新しいが、然し大學部の卒業生が日本銀行興業銀行、十五銀行、朝鮮銀行等頗る廣汎に亘つて發展してゐる。又三井、三菱、住友、久原等にも多く入社してゐる。卒業生は主に實業界に就職し、少數は教員に成つてゐる。歴史の古い學校だ

け頗る廣範圍に亘つて、社會に貢獻してゐる。故に私立だからと言つて強ち繼子扱ひにする必要はない。特に此頃各會社銀行で、私學、官學の差別撤廢が叫ばれ、その先鋒としては實業界の覇者三菱がある。入學試験は前述の如く英語に特に重きを置き、英語が出来れば大丈夫であらう。問題も一寸頭を二三回振らんと解し難いものが出るかも知らん。僕は今一人で非常に心細い。久保田五六君も本高商の學生ではあるが、病氣で休學して居られる。來春は英語をば眞摯に、徹底的に學ばれんとする方の一人も多く入學せられんことを望んでゐる。書き遅れたが本高商は普通の高商と、その課目は全く同じであるが、英語で教授し得る課目は英語でやつてゐるのが趣が變つてゐる。規則書御入用の方及び本校の内容等詳しく知りたいといふ方は、ごしごし御問合せ下されば、出来るだけの事は御答へ致します。つまらない事を長く書きまして失敬しました。諸兄の御健康と御勉強とを祈つて擲筆します。

長崎高商より

同校 山根 熊藏

六百に近き學生は、毎日西山の小高き丘陵上の校舎に集ひ、楽しく暮してゐます。校内の設備もよく、先生も皆勤勉なる人のみであります。山口縣人は現今では二十七人で、萩中出身は私一人であります。誰しも郷人の親しさは同じであります。如何なる地、如何なる時にも、郷土をバツクとし、其の心は異郷にある時に、特に強大を感ずるのであります。故に他郷に於いて、己に近き者を見出した時には、強い愛着の念が起り、それが強い團結心となるのであります。我等も山口縣人會を組織して、此の南國情緒の滿ちた崎陽の地で、防長の歴史を飾る事に勉めてゐますから、諸君も奮つて御志望なさらんことを希望して止まないののであ

熊本五高より

同校 井町 勇

ります。次に試験の事について一寸氣の附いたことを言つて見ますと、
一、英語はやはり此處は短い文で、フレーズの多く使つてゐるのがよく出る様です。去年は難しい單語が澤山並んでゐたのが一問ありました。
一、數學は去年は非常に易かつたのですが、餘り難しいのは出ない様です。
一、國語はまだ現代文は出ない様です。去年も現代文は一問もありませんでした。
一、漢文は簡野道明氏の教科書をよく讀んで置けば大抵出來ます。
紙數に限りがありますから本校の内容規則等は書かれませんが、御希望の方は直接に手紙を下されば知つてゐる事は御知らせし、又出來るだけ便宜を計ります。宛名は高商内宛で宜しう御座います。

武夫原の草露に濡れ乍ら、空高き秋の月を眺める時、私の心は忽ちに故郷の山川、故郷の學舎、故郷の知友の上に走つて行く。私は茲に貴き雜誌の一頁を汚させて戴きます。

偉大なる田舎！私は熊本の街路郊外を散歩する度に必ずさう思ふ。さうして私は諸君に熊本市なるものゝ概念を與へる爲にも、是以外に言ふべき言葉を有つてゐない。此處には歡樂の巻もなく、目の覺める様な名勝も無い。けれども、東に聳えたるあの阿蘇の聖山と、龍田山麓に集ふ一千の丈夫は、夙にその名を全國に知られた羈者である。

ゆかしき龍南！五高とはどんな所かど聽かれたら、私は只一口にかう言つてしまふ。一千の校友には一千の個性が活き、各自はその長する所に専心向上を圖つてゐる。それで以て而もあの傳統的校風——剛毅朴訥の綱は各分子を運ね合せて、實に美しい自治の城を築いてゐる。
諸君の先輩、大谷、石津、堀永、阿部の諸氏は本年卒業せられ、その後、鈴木、田坂、下村、藤田、大山及私の六名が入つた。今や本校の萩中

卒業生は、金子、板垣、吉武、上野、竹内、岸田、篠原の諸兄を合せて十三名の多き上つてゐる。
入學試験に就いては恐らく諸君の方がよく知つて居られるでせう、私の考では學校で教へられた事を直ちに活用して見ることを早くから譬付けて置くがよいと思ひます、中學校での一時遣れの勉強法は今日入學試験に應用が出來ぬ、参考書や問題集は限られた時間の利用法の研究や、自分の力に自信をつける爲にやつて見る位のものでせう、(勿論暗記物に就いては別です)、兎に角高等學校の試験には難しいものは出ないでせう、
勝者となつて下さい、さらば

第四學 修學旅行記

野村、内山、瀧口記

五月六日 雨後霧

雨は霽れた。我々第四學年の修學旅行團九十八名は、相島先生の指揮にて、金屋の天神社前より力ある旅行第一歩を踏み出した。各自の顔は震へる程の喜びと、緊張した気分とが漲つて居る。グートルに下駄、或は草鞋と云ふ奇抜な粉装に身を固めて、七八人づつの組に分たれ、小さな提灯の火を取まきながら進んだ。其の光が暗夜の中に點々と續いて、勇ましい軍歌が前後相應じて聞へる。眞に血湧き、肉躍るとは、此の時の感であらう。鹿脊坂の邊から次第に霧が深くなり、トンネルを過ぎてまたトンネルの中を歩んで居る様な気がする。やがて明木も過ぎて、今日の旅行第一の難所たる一升谷の險に通りがつた。深い霧とあやめも分らぬ闇の中に長く長く續く山中の小道を、螢の火の様な提灯の光をたよりに、黙々として進む。一百の健兒、疲れては来る、眠氣は増すも歌を歌ふ勇氣もなければ、話す勇氣もない。高い杉の木で兩側を鎖された山道は、唯さへ暗い上に霧に埋められて一間先は見えない。今にも消ゆるさうな火影に映るのは、同行の二三人のみ。聞ゆる物は岩にせかるゝ谷水の音と、時々聞ゆる泉の聲、實際苦しい。全く夢地を辿る様な気がせずには居られなかつた。

五月十日 晴

さて櫻の茶屋の點呼が済んだのが一時過ぎたつたらう。一同顔を合せて喜びに、大いに元氣を回復した、唯闇の中を驚地に急いだ。

小學校及女學校生徒合宿の賑やかな夕食を終つてから十一時まで自由散歩を許された。各自美しい博多の夜景と可愛らしい博多人形に目を喜びして床に就いた。(野村久一記)

五月八日 晴

この日天晴れ、氣朗にして、旅行には絶好だ。今川橋行きの電車に乗つて、西公園に赴く。商業地帯の博多を過ぎ、那珂川を渡れば福岡に入る。黒田民の城——福岡城址は濠にかこまれて居て、濠を隔てて向には人家がうすうすで見ゆる。電車は西公園に着いた。公園後に荒津山を登へ、前に街道を隔てて濠を有する。黒田侯を祭つてある光雲神社に参詣した。櫻花早や悉く散つてさびしく、訪ふ者が少い。鵜飼、藤などが今を盛りと咲いて居る。荒津山に赴く。曙状をなして博多灣に臨んで居るから、福岡市は歴々として我等が眼界に入り来る。荒津山を下り元の道に引返す。公園の前には博多人形を賣つて居る。聖母マリア、キリスト等は著しく吾人の目をひいた。

午前十時半ステーション前に集合、同十一時零一分汽笛一聲を發して、汽車はプラントホームを去る。偉大なる哉、日蓮の銅像。千代の松原の白砂青松、元寇の史蹟、過去の歴史に抱擁せられ、今尚傑として光を放つて居る福岡市は、吾人の生涯の記憶に残るべきものである。福岡市は眼界より遠ざかる。最早見ぬない。北九州大平原の中には工場が各所に點在して居る。鯨はゆるとうたはれた支海灘は右手に、波は岩石にあたり、玉と砕けて有りし昔の蹟を忍ばせる。二日市到着、大宰府驛の分岐點である、單調な平野の中を行けば、鳥栖についた。プラントホームの向には「長

第二の難所たる一の坂の頂上についた頃から、夜の暮は次第に斜がれて、谷間より送る朝風も涼しく、霧は追はれて、重々たる緑の山々が、嬉々として我々を迎へた。處々に鵜飼の花が見えて、霞の中から雲の鳴聲が聞えて来る。此の偉大な優美なシーンに元氣附けられた我々が、踏む足も軽く山口に着いた時が七時過ぎた。流石教育の中心地だけあつて、街路は登校する學生で非常に混雑して居る。停車場で旅装を整へ、暫く自由に散歩した後、八時十分の汽車に乗つた。伊藤先生は友人とか云ふ西洋人と、汽車が出るまで話して居られた。此の英語の先生と、西洋人と云ふ面白い對象は、皆興味ある目を以つて迎へられた。先生等の握手が終つた頃、汽笛の聲もともに汽車は動き出した。小郡で更に下り列車に乗り換へ、新興の都會宇都部市を左に眺め、幾つかのトンネルを過ぎて下關に着いた。時に十一時四十分、幾多の大船巨船に目を驚しなが、連絡船で門司に上陸し、暫く博多行の列車の人となつた。福岡の工業を代表すべき八幡製鐵所、及其の附近にある色々の工場が最盛なものには驚いた。至る所の港に寄泊して居る無数の帆船の櫓が林立して見ゆる。色々座敷に就りながら行く程に、間も無く箱崎驛に着いた。此の處で下車し、八幡宮に参拜した。縁廻らぬ千代の松原の中にある水族館を訪れた。目のあたり大小奇異の魚が泳ぐ様も面白く、其の形體性情一目瞭然たるの感があつた。此處に暇を告げてよりは、龜山天皇や日蓮上人の巨像に目を奪はれる。敵國降伏の四字には、此の四邊一面、修羅の巷であつた昔が偲ばれて、只管感慨の念に堪へない。疲れた體を電車博多驛まで運び、驛から程遠くない高島旅館に旅装を解いた。

時行」と書いた汽車が正に發車せんとして居る。耕で有名な久留米も身に染む不景氣風はあざむかれず、煙突から出る煙もうすい。汽車は再び海岸に沿つて走る。有明の海が目前に展開する。遙か彼方にかすむ島嶼の間に點綴する眞帆片帆、山陽の詩も思ひ浮べられる。

雲耶山耶矣耶越。 水天碧靑一髮。
萬里泊舟天草洋。 烟橫蓬窗日漸沒。
瞥見八魚波間跳。 太白雷船似明月。

不知火のその間に點在する夜の光景がなつかしい。海がつきると再び山に入った。緑の中を汽車はゴトンゴトンと軽い響を與へて進んで行く。上熊本到着。白線帽——我々の先輩が乗り込んだ。車中にはかんにぎやかになつた。熊本！ 本熊！ と云ふ驕夫の聲が聞ゆる。一同下車、時に午後二時九十三分。一時間許りの自由散歩の後、再び車上の人となり、宮地に向けて出發する。遙か彼方には阿蘇の噴煙が見ゆつかくれつして居る。燈火さびしい立野を過ぎると匂配が急になつた。汽車一度進行して他の線路を取る。阿蘇は暮色の中につままれて、無言の中に威嚴を示す様に黒煙は空になびいて居る。夕月は淡く阿蘇の噴煙に光を投げ星光はあはく大穴口原を照して居る。四圍暗黒となり来るに隨つて、阿蘇の噴煙は膝々として濃くなつて行き、外輪山は我々を中心として圓周をかいて居る。汽車は夜の静けさを破りながら進んで行く。健兒の唱ふ校歌は車外にもれて木立を廻り彼方の山にあたつて反響する。午後四時宮地についた。阿蘇山のアトモスフィヤに送られて、旅館に到着。夕食後自由散歩、十一時就床。

五月九日 晴

朝食して官幣大社阿蘇神社に参詣する。社は二千年來の古社で、社殿は桓武帝の皇居を模したものだ、老木あたりを圍み、その神殿壯麗な事は到底筆紙に盡されない。神陵に到れば自づと威厳があつて頭を屈むのを覚ゆる。宮司は歴史に有名な阿蘇大宮司家である。此宮は神武帝の第三皇子神八井耳命の御孫盤龍命以下十一柱を祭る。社務所に於て紀念のスタンプを捺して貰ふ、参詣を終へて阿蘇頂上に向つて宮地を出發する、廣茫たる大火山原の中を一行は婉々として進む。草木は一般に低平にして土は火山灰だ、目的の中岳に他山に蔽はれ白雲に包まれてその姿を見せない。外輪山は大海に浮ぶ列島の如く見ゆ、連山歴然として我が眼界にある。六合目頃になれば、萬目悉く火山岩と化し、一本の草木だに見ゆない。中岳は巖然として聳ゆ、最高峯高岳は群山を遙かに凌駕して居る。

午前十時半遂に中岳噴火口に達す。噴火口は新舊併せて五つ、その中一つが最近に出来たので、今盛に活動して居る、噴火口附近一帯は土が青黒い、村岡先生の説明によれば硫黄の遊離だとか、舊噴火口は熱湯をたゞ宛然然焦熱地獄の感がある。深さは數千尺もあると案内者が説明した、噴火口底は火燭水蒸氣に反射して爽々たる一大燭の様だ。奇跡と云はんか、絶景と云はんか、閑雅と云はんか、將た莊嚴と云ふべきか。この噴火口を山心として、彼方には根子岳聳ゆ、此方には高岳がある。大自然の神祕は之だインスピレイションは之だ。北九州工業地帯を離れて之に遊ぶ時宛も仙境にあるの感がある。

泉石の配置甚だ佳を極め、園内には藩主の祀廟たる出水神社がある。江津湖は此の東方にあつて一幅の畫の境だから一名畫園湖と云ふ。

一同自動車に分乗して丸子旅館に達す。歸館後卒業生主催の茶話會を開く。夕食後午後十一時迄自由散歩を許され、新市街等を見物す。歴史に光る熊本市、夜の市街は特に美しい。總て電車もつくから市の面目も一新されるだらう。就床十時。(内山誠記)

五月十日 晴後雨

午前六時目を覺した。今日も天氣だ、朝食後旅装を整へ、宿の前に整列して、吾校卒業生の五高生に先導せられて、高校參觀に向ふ。ちようご學校の始業時間であつたから、登校する學生が頗る多かつた。高等學校の敷地は初め大學を建設する筈であつたが、福岡に大學が建てられたので、此處に高校が建てられたと云ふ事だ。校舎は赤煉瓦造りだ。柔道場などもあつた。一週して熊本城に向ふ。西南の役に谷千城の奮戦された所、また石垣は昔のまま、所々に城の跡が窺つて居る。昔の盛な状態が想像せられる。恰度その時廣場で練兵して居た。少時休んで本妙寺に向ふ。昨日の阿蘇登山の疲がまだ抜けず、其の上陸分道が遠いので疲れがたまつた。清正公の祀つてある本妙寺に到る。山門は丁度修理中であつた。山門から頂上までは大分遠い、三十分間休憩して上熊本驛に至る。午前十一時三十一分遂に色々と世話になつた、五高生と別れて、汽笛一聲門司に向ふ。汽車中より戸外を眺むれど別に變つた事もない。亘々たる道と、長く續いて居る山と、時々見ゆる海だけである。汽車中眞に無聊、或は眠る者もあり、又本

世界の火山王、我が阿蘇山は熊本市の東方約十里にある。海拔四千六百尺頂上は半切せる円錐體をなして、構造上複火山に屬し、裾野四十二平方里の廣きに及ぶ、面積の廣くして高度小なるは富士山にも比すべき峻峯の頂上、隆起又は侵蝕の爲大半消失して今の如くになつたと考へられて居る。外輪山は高さ三千三百尺内外で最高の冠岳でも僅か三千八百尺、その内壁は削るが如き傾斜をなして相連り、西部に二個所の低所を有して居る。側部は侵蝕作用の結果火山特有の無數の放射狀形を作して居て、築後、赤池、白川の諸川、この邊りを水源地とす。内輪山は杵島岳、烏帽子岳、高岳、根子岳、中岳の五岳より成り、最高峰高岳海拔五千五百尺、根子岳は露齒狀をなして頗る偉觀を呈して居る。古川先生の根子岳突破は一行中殊に目を引いた。

貴食人員點呼後振木に向つて下山す。時止に午後一時。中腹に到れば、阿蘇山上神社がある。古來歴史に有名な神靈池は之である。此處より振木迄一里半、振木より立野迄二里、また約三里半の山路を歩かねばならぬ。登山に疲れた身を以て、下山に當るのだ。火山岩盡れば一大高原あり、牛馬の牧畜盛である。高原盡れば山又山、河あり谷あり、一行の行進をさまたぐる事甚しい。振木温泉で小憩後立野メーションに向ふ、雜木列る大森林、雜草茂る淺茅が原を過ぎ、數十町行けば路が途が一致した。トンチの彼方で汽笛が聞ゆる。立野驛につけば濃車は早發車せんとして居た。數里の山路を僅が一時間で突破した我が萩中健兒の勇氣は之である。

車は水前寺についた。水前寺公園は細川侯の別荘であつた所、を見るものもある。二時間ばかりすると、空が曇つて雨が降り出した。萩を出てから四日間幸にも、雨が降らずに無事に阿蘇山にも登り、見るべき所も見て、今歸路初めて雨が降るとは、實に天の助であつた。これを偶然の天佑とでも云ふのだらうか。久留米を過ぎ、日蓮上人の銅像にも別を告げて、福岡を過ぎ、一步一步と門司に近づいて行く。夕暮の帳は次第にあたりを包んで來た。午後七時十五分門司驛着、下車して直に連絡船に乗つて下關に向ふ。夕靄の中見ゆかくれる兩岸の數百の電燈、大小の船舶の間に、關門海峡の水に映じて、流石はと此の海峡の繁榮を頷かせる。下關着、宿屋の人に迎へられて、宿に向ふ。夕食後又一且晴れた雨が降り出した。明日の事を心配しながら、午後十時頃就床。

五月十一日 晴

午前五時起床、昨夜氣遣つた雨は名残りなく晴れて、今日の歸萩を祝福するかの様である。いよ／＼今日は此の旅の最終日、又一の坂の險を越えて故郷に歸るのだ。午前七時下の關驛前に整列七時二十分發車、最早旅行終りの事であるから、皆疲れきつた眼をして居る。午前十時二十三分小郡着、約五十分待ちて又十一時十八分小郡發、山口に向ふ。車中にて晝飯を喫す。約三十分して山口着、運送店に行き、靴をはきかへる。五日前に此處に着いた時の好奇心に燃れたあの顔とは塵泥の相違、皆疲れきつた表情をして居る。十二時山口發、一の坂に取りかかる。下からあの高い所を眺めた時、もううんざりしてしまつた。咽喉は渴き、足は疲れ、一歩々々ゆるやかに進んで行く。友と話して行けば何時の間にか、一の坂の險も越えてしまつた。一の坂の下で一度點呼

し、佐々並を過ぎ標の茶屋に到る。いよいよ一升谷を下れば明木とうとう故郷に歸つて来た。一同金谷神社で解散するとの事、皆に別れて家に歸る。午後六時半。嗚呼我々の修學旅行も、此に終を告げたのである。あの茫々たる

中腹の草原、曠々として立上る標の下千尺、湧湯湧き、人心を寒かしむる噴火口、程々の有徒なるものを見馴し得たるを喜ぶと共に、諸先生の幹旋を感謝するのである。(瀧口三郎記)

統計のいろく
大正十一年度縣下中學校卒業生及四年修了者で、上級學校に入學し九者の歩合は左の如くである。

岩中(四割六分五厘) 萩中(四割五分二厘) 興中(四割) 周中(三割九分七厘) 鴻中(三割五分四厘) 山中(三割) 豊中(二割三分七厘) 徳中(二割二分五厘) 國中(一割)

校報

◎第二十三回卒業式

三月五日午前十時より第二十三回卒業式を本校講堂にて行ふ。橋本本縣知事代理として本間學務課長來臨、其他來賓多し、學校長勅語捧讀の後、卒業證書を一括して卒業生總代頼野孝夫に授與し本間學務課長及岩田學校長より賞品を授與し、學校長告辭、知事代理告辭、來賓總代平瀬將軍の祝辭、在校生總代井町勇の祝辭、卒業生總代頼野孝夫の答辭、父兄保證人總代玉木源輔氏の謝辭あり、午前十一時十分閉式す

卒業生左の如し(イロハ順)
一、卒業の際七席以上にして、同窓會獎學賞を受けし者、頼野孝夫、原吉雄、藤田孝慶、木原秀雄、瀧口寛作、三浦不二夫、稻田保治

卒業生にして受賞せし者の左の如し。
一、學力優秀、精勤にして且伍長を勤め縣知事より褒狀を得しもの、頼野孝夫、藤田孝慶
一、學力優秀、且伍長を勤めし者(以下學校長より受賞 原吉雄
一、五ヶ年間皆勤し、且伍長を勤めし者、鳥居勝、横山秀雄
一、五ヶ年間皆勤せし者、玉木利夫、兼田重徳、波多野義實
一、本學年間伍長を勤めし者、木原秀雄、柿並武夫、下村定儀、三浦不二夫、山中茂、佐伯正七、瀧口寛作、村上定介、箭島薫、岡知教、稻田保治、岡村斌、田坂達次
一、本學年間無缺席なりし者、鳥居勝、横山秀雄、兼田重徳、波多野義實、村木勲三郎、玉木利夫、頼野孝夫

禮村 彦一	石光進吉郎	稻田 保治	伊藤 春雄
原 吉雄	原田 泰	羽島 彌救	波多野義實
仁保 強	堀永忠次郎	堀上 孝助	堀 斌
鳥居 斌	宮村 勝	頼野 孝夫	小野 基治
小川 薫	岡 知教	岡本 直一	岡村 斌
和田 五郎	和田 泰九	柿並 武夫	河村小次郎
河上 春亮	香川 義信	兼田 重徳	桂 博之
神代 龍雄	吉村 侃二	横山 秀雄	玉井 忠彦
田中 信吉	高橋 吉郎	瀧口 寛作	田邊武次郎
高尾日出彦	竹下 五郎	田坂 達次	玉木 利夫
都野 勝彦	坪井 乘雄	津崎平八郎	長濱 俊二
中村 薫	中村 重藏	難波 泰	長濱武四郎
村田 清男	村上 定分	村木勲三郎	野村 要
奥田 稔	大橋 一夫	大島 太郎	鬼武 幹亮
久保田五六	山中 茂	山本 起夫	山本 公輔
山田 清華	山田 勝慶	箭島 薫	山根 次郎
山根 熊藏	山根 芳雄	益田 致義	松崎彌太郎
藤田 昇	藤田 孝慶	古本 武男	寺戸 英和
寺田 進治	秋枝 純逸	佐伯 正七	木原 秀雄
北本 三郎	三浦不二夫	下村 定儀	鈴木 一夫

以上總數八十人、本校創立以來卒業生合計一千三百四十五人

◎縣立學校生徒獎勵規程に依る受賞者

四月九日新學年の始業式あり。式後前學年に於ける第四學年以下の生徒に對し、左の通り賞品、賞狀の授與式行はれたり。

一、筆記帳四冊 (特別賞)

三年 横山幸生 野村久一 一年 小橋一義 野稻清定

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ、學力優秀ニシテ伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ、依テ前記ノ物品ヲ賞與ス(各通)

一、筆記帳三冊 (一等賞)

四年 井町勇 三年 多田利雄 山本馨 二年 田村義雄

岸音熊 一年 永富正郎

學力優秀ニシテ能ク校則ヲ守リ、伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ、依テ前記ノ物品ヲ賞與ス(各通)

一、筆記帳二冊 (二等賞)

四年 福田幹雄

學力優秀ニ付前記ノ物品ヲ賞與ス

一、筆記帳二冊 (二等賞)

四年 來島勝男 三年 木島俊雄 山中不二夫 吉田勇

田中勝太郎 二年 大和忠雄 阿武義輔 松浦兼三郎 松永哲彦 市原茂樹 廣順一 一年 小枝清 藤井勇 中島眞平 松原博 下瀬知雄 村木七郎 天野俊雄 棚源助 小原美紀 久保一郎 横山剛熊

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス(各通)

一、筆記帳二冊 (二等賞)

四年 西島丈夫

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、筆記帳一冊 (三等賞)

四年 土田 伊平 石丸 孝一 有田 勝正 齋藤 彰

三年 追山 六郎 田原 節夫 平林三七雄 多田 義男

二年 板垣 肇 大山 岩雄 津田 巖男 杉 丙三

一年 伊藤 貞一 池田 謙三 弘中 勝 鹿島 國好

三年 高尾 延彦 内山 誠 田中 松一 山本 浩

二年 倉重 達郎 河邊芳太郎 林 不二雄 谷川 清

一年 瀧口 三郎 大谷 正信 末益 清人 山田 明

二年 藤田小太郎 香川 俊男 長濱 誠三 櫻井平八郎

一年 大嶋 政輔 中津 桂三 長濱 誠三 櫻井平八郎

一年 永見 眞人 村木 忠治 長濱 誠三 櫻井平八郎

一年 大永金太郎 尖戸 武夫 木村 輝房 宮崎 三郎

本學年間伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス(各通)

一、筆記帳一冊 (三等賞)

四年 首藤 誠一 上村 義男

三年 野村 久一 恒藤 雄碩 山中不二夫

本學年間整長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス(各通)

賞與ス(各通)

一、賞狀 (四等賞)

四年 丸尾 誠二 大島 新三 青木 弘 横田司馬年

三年 藤村 五郎 寺戸 英雄 三島 文平 齋木 豐

二年 堀 文吾 常川 治 那須 武夫 吉武 博

一年 井關 清榮 田中 誠 小方 數馬 三原 清治

二年 福島 皓一 田北 泰 植村 敬 尾崎 忠相

一年 常川 明 中塚 俊二 吉屋 壽 今地 嘉勝

二年 益田 兼清 久保 花月 大和 己天 平田 保雄

一年 戎原 優 來島 正道 波多野 公 竹重 喜功

二年 長谷川正也 藤下 長俊 永田宗一郎 田村 秀雄

一年 三好 悦治 西村 隆雄 石光仁吉良 田村 秀雄

二年 村岡 幸作 松浦 義教 瀨川 洋 原 一衛

一年 時深 信 杉山 臣次 赤木 俊雄 末成 寛

二年 安部 實 土屋 秀雄 椋 正隆 井上 五郎

一年 吉村 醇 藤田 虎一 木村 利信 見玉 玄太

二年 濱村 伸 平田 清次 田中 秀雄 清水 豐吉

一年 繼 弘 吉村 貞治 松尾 改雄 永田孫太郎

二年 津森 剛 森澤 史郎 篠原正太郎 内田 巽

一年 岡本權兵衛 坂倉光太郎 森屋 魚藏 野中 清七

二年 青木 潤次 陽 爲哉 西村 重晴 野中 清七

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍テ之ヲ賞與ス(各通)

一、賞狀 (等外)

四年 伊藤 己 惠美須屋三吉

三年 阿武 四郎 久保田 穰 池田 三郎 岡部 順一

二年 松浦 正 村上 景介 永松 正守 大岡 純二

一年 藤山 光雄 厚東 重雄 井上 宗親 山根 文作

二年 木村 輝房 伊藤徳太郎 阿武 眞一 杉野 一次

一年 中村 明 須山 靈殿 三村 健 伊藤 満

二年 山縣 信夫 白石 茂次 新山牛治郎 中島 一時

一年 柴田 哲夫 阿武 茂 津田 茂 永松 三衛

二年 伊藤 滋 萩 紹之 杉山 清 益田 實

一年 本永 鴻 横山 光雄 益田 實

本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞與ス(各通)

同日同窓會よりも獎學賞の授與あり。姓名は同窓會誌に譲る。

◎先生の更迭

大正十一年十一月より、大正十二年十月に至る滿一ケ年間に先生の更迭せられし者左の如し。

△土肥守邦先生、大正十一年四月、島根縣立大田中學校に轉任せらる。

△森本榮先生、同年同月、廣島縣立第二中學校へ轉任せらる。

△香川政一先生、同年五月、萩町立商業學校より來任せらる、地理歴史科擔任。

△近藤文雄先生、同年五月、大分縣立宇佐中學校より來任せらる、英語科擔任。

△石川修三先生、同年六月、栃木縣立神籠學校に轉任せらる。
△齋藤春爾先生、同年七月、石川縣立第一中學校より來任せらる
英語科擔任。

◎大正十二年度學友區幹部

大正十二年學友區幹部左の如し。但、小區友長及副友長は選舉の結果當選せるものなり。

- | | |
|---------------|-----------|
| 東萩學友區長 田中先生 | 副友長 堀 清一 |
| 第一小區 友長 中村 靜雄 | 副友長 三好 治男 |
| 第二小區 友長 原 龍三郎 | 副友長 山本 薰 |
| 西萩學友區長 船木先生 | 副友長 上村 義男 |
| 第一小區 友長 青木 弘 | 副友長 山本 薰 |
| 第二小區 友長 高村 忠雄 | 副友長 栗屋 昇 |
| 南萩學友區長 金子先生 | 副友長 横山 幸生 |
| 第一小區 友長 鹿島 國好 | 副友長 吉崎謙一郎 |
| 第二小區 友長 卜部 忠雄 | 副友長 守重 眞雄 |
| 第三小區 友長 井關 清榮 | 副友長 吉賀 春一 |
| 北萩學友區長 中津江先生 | 副友長 西村 秀隆 |
| 第一小區 友長 谷井 力 | 副友長 長嶺 正博 |
| 第二小區 友長 波多野爲一 | |
| 第三小區 友長 熊谷 吉衛 | |
| 中萩學友區長 駒田先生 | |
| 第一小區 友長 堀永昌三郎 | |

- | | |
|----------------|-----------|
| 第二小區 友長 宮原 恭一 | 副友長 橋本 士郎 |
| 第三小區 友長 福田 幹雄 | 副友長 來島 勝男 |
| 東萩學友區長 伊藤(徹)先生 | |
| 第一小區 友長 杉 丙三 | 副友長 伊藤 貞一 |
| 第二小區 友長 岡田 友市 | 副友長 山村 清 |
| 第三小區 友長 野村 保彦 | 副友長 伊勢屋泰輝 |
| 西萩學友區長 村岡先生 | |
| 第一小區 友長 田中 豐 | 副友長 堀 市熊 |
| 第二小區 友長 石丸 幸一 | 副友長 藤田 繁一 |
| 山田學友區長 山本(百)先生 | |
| 第一小區 友長 西山 馨 | 副友長 田村 義雄 |
| 第二小區 友長 惠美須屋三吉 | 副友長 谷川 清 |
| 特別學友區長 山本(光)先生 | |
| 第一小區 友長 森田 誠 | 副友長 吉田 勇 |
| 第二小區 友長 瀧口 三郎 | 副友長 宇田川重雄 |
| 第三小區 友長 松尾松千代 | 副友長 松本 武夫 |

校 談

(節略)

(自大正十一年十一月
至大正十二年十月)

- 武道大會、十一月一日舉行。
- 松陰先生追慕會、十一月廿一日、講堂にて舉行、古川教諭の講演あり。
- 辯論部大會、十一月廿七日、講堂にて舉行。
- 松陰先生誕生地紀念除幕式、十一月廿八日舉行せらる。生徒一同參拜。
- 職員對寄宿舍生徒庭球試合、十二月二日舉行。
- 課外講義、十二月九日、萩町長北野右一氏を聘し、第四、五學年生徒に對し町村自治の講話をなす。
- 發火演習、十二月廿日、樺東村椎原臺附近にて舉行。
- 武道集禱古、一月十日、本日より向二週間毎朝午前六時より八時まで施行。
- 武道大會、一月廿五日舉行。
- 故山縣公爵一週年祭、二月一日、公の舊邸跡にて舉行、本校にては講堂にて古川教諭の講話あり、終了後生徒一同參拜す。
- 長途競走、二月十日舉行。
- 卒業式、三月五日、第廿三回卒業證書授與式舉行。
- 學力檢定試験、三月廿四日、尋常科第五學年兒童の學力檢定試験舉行、受験者五名、參名合格す。

- 入學試験、三月廿五、六日舉行。
- 修學旅行、五月七日、第四學年修學旅行隊出發、五月十一日歸校。
- 遠足、五月十二日、二、三、五年生徒、大井村水力電氣發電所見學の爲め遠足、一年生徒は萩の史蹟巡りをなす。
- 酒艇部大會、五月廿七日、明倫館に於て廣工廠勤務光井機關大佐の講話を聞き、十時より橋本川に於て酒艇部大會を行ふ。
- 辯論部大會、六月廿五日舉行。
- 競技大會、六月廿八日舉行。
- 武道大會、六月三十日舉行。
- 驅逐艇拜觀、十月八日、萩港碇泊中の舞鶴軍港所屬の驅逐艇を拜觀。
- 山口行選手出發、十月十二日、山口縣體育大會派遣選手の送別式を舉行す。學校長の挨拶、生徒總代杉丙三及選手代表來島勝男の挨拶あり。同十六日選手慰勞の式あり。
- 運動會、十月十八日舉行。
- 保證人懇談會、十月廿四日、五年生徒の父兄保證人懇談會舉行同日生徒成績品の展覽會をも開く。

◎長距離競走成績

大正十二年二月十日施行の長距離競走の成績は左の如くである。

等級	隊 號	参加人員	落伍人員	平均一人時間
十一	一ノ一	三三	三	六二分一四秒
九	一ノ二	三四	三	六〇、一一
七	一ノ三	三八	〇	五五、三九
合計		一〇四	六	五八、二一
二	二ノ一	四〇	一	五〇、〇三
一	二ノ二	四〇	四	四九、三九
合計		二ノ三	三	五三、四〇
五	三ノ一	三五	二	五一、〇七
十	三ノ二	三七	七	五四、二一
合計		三ノ三	〇	六〇、四六
八	四ノ一	三六	九	五五、四二
十二	四ノ二	二九	八	五九、三四
合計		四ノ三	二	八五、〇八
六	四ノ三	三五	二	五四、二九
合計		一〇〇	一九	六六、二四

總評 第一等 二中隊 第二等 三中隊 第三等 一中隊

第四等 四中隊

レコードを比較すれば

年 度	小隊ニテ	中隊ニテ
大正十年	四一、二九	四五、二三
大正十一年	四二、三二	五三、三二
大正十二年	四九、三九	五一、〇七

◎辯論部記事

本年度、春季辯論大會は、六月二十六日、午前九時、新講堂に於て開會、正午を以つて閉會す。各辯士の滔々と熱辯を振ひて、誠に蘇秦、張儀をして、後に瞠若たらしむるものあり。然れども、一般に、思想幼稚にして、人を動かすの辯、少なりし事と、特に本日は、時間の都合上、己むを得ず午前中にて閉會の豫定なりしかば、希望辯士の全體を登壇せしむる事能はざりしは、共に一同の不本意に堪へざる所なり。

猶、本日午後一時より。當時來稿中なりし、軍事講談家、伊藤次郎氏より、「華府會議の裏面」に付き、長時間に渡る談話あり。其の間、一同の健兒等は、午前よりの、疲れし色も無く、若き血潮の湧き、肉躍り、大いに感奮せる面も眺められて、痛快、此の上もなかりき。

本日のプログラム左の如し。

一、開會の辭

部 長

- 一、不運なる説、伊井直彌
 - 一、生命の完生
 - 一、頭腦猛士
 - 一、甲斐ある人生
 - 一、不思議な心の働と、精神の修養
 - 一、青年、須らく、軟文學を排すべし
 - 一、ニエートンを見て
 - 一、(討論) 平和主義か？軍國主義か？
 - 一、閉會の辭
- 部 長 (山崎生誌す)

- 各中隊選手左の如し。
- 第一中隊 植村 敬 平田 光雄 田中 松一 藤田 繁一 村木 七郎
 - 第二中隊 田中勝太郎 山村 清 大和 義男 岩田 貞天 小野村 茂
 - 第三中隊 小方 數馬 村木 喜八 阿武 義輔 三浦 八尋 田中 次郎
 - 第四中隊 佐伯 義治 阿武 四郎 山崎 誠 村木 忠治 小橋 一義

◎漕艇部記事

△漕艇大會、五月廿七日開會、午前中よりしばし驟雨來りしも届せず、雨中に競漕を繼續せしは感すべきなり。第十回第二中隊第四中隊の選手選あり。二中隊優勝す。第十二回第一中隊、第三中隊の選手選にては三中隊優勝す。最後に第二中隊第三中隊の決勝競漕となる。此時に於ける各中隊の得點は、第一(二十一點)、第二(二十二點)、第三(十九點)、第四(十九點)にて勝敗の數已に定まれり。競漕の結果第三中隊意氣振はず、遂に月桂冠は第二中隊の手に歸せり。當日のレコード左の如し。

第十回豫選 第二中隊 十分五十一秒五分ノ三

第十二回豫選 第三中隊 十分四十九秒五分ノ三

第十五回決勝 第二中隊 十分四十八秒五分ノ四

◎武道寒稽古出勤狀況表

(甲)出席者一日平均數調

年 度	延人員	一日平均人員	部員數	百分比	期間
大正十年	三三七〇	二四〇	三〇九	七七	一四
大正十一年	二九二六	二二二	三一	六八	一四
増	減四四四	減二八	増二	九	
大正十年	二六五五	一八九	二五三	七四	一四
大正十一年	二八七八	二〇五	二七二	七五	一四
増	減二二三	増一六	増一九	一	

(大正十一年度全生徒毎日平均七割五分強出勤期間十四日)
(大正十一年度全生徒毎日平均七割一分強出勤期間十四日)

(乙)皆勤者數調

年	度	部員數	皆勤者數	百分比	精勤者數	百分比
大正十年	増	三〇九	一四四	四六	五三	一七
大正十一年	減	三一	一四一	四五	三〇	九八
大正十年	増	二五三	三	減一	減二三	減七二
大正十一年	減	二七二	一六四	四八	四〇	一五
大正十一年	増	一九増	四一	増一二	減二四	減九二

(大正十一年度全生徒ノ四割七分 皆勤期間十四日)
(大正十一年度全生徒ノ五割二分強 皆勤期間十四日)

◎武道部記事

一月二十五日、寒稽古後大会を行ふ。
六月三十日、第一學期大会を行ふ。

△京都武徳殿演武大会

七月二十五日より開催。本校出演選手
(劍)長嶺 正博 守重 眞雄 伊藤 貞一 山縣 勝
廣田 一雄 岡 秀雄 (有志)
(柔)佐伯 義治 原 龍三郎 西村 秀隆 弘中 勝
守重 光雄 竹内 六郎 (有志)
個人試合。劍共其に良好。
団体試合。劍道部は金澤二中と第一回戦に組み敗れしが敵は優勝戦まで花々しく奮闘の腕前なかなか美事。徳中を惨敗せしめた。

◎競技講習會

八月二十四日から同月二十八日迄、山口高等商業學校のグラウンドで本縣教育會主催、陸上運動競技講習會が開かれた。講習會員二百餘名は講師野口氏及び佐藤氏より熱心なる指導を受けた。二百餘名の健兒が、炎天の下で活動しつつある光景は、實に雄壯なものであつた。我々からは井村先生引卒の下に、伊藤、寺戸、河内、益田及び我々二人の六名者が出席した。朝は八時から十一時半頃迄、午後は二時から五時頃迄、四日間渡り走法、スタート、フイニツシュ、跳躍法、投擲法、等の講習を受けた。第五日目は小競技會が催され、十一時半から講習會終了式あり、野口氏の報告及び來賓の祝辭ありて閉會した。此の日の競技のレコードは大體左の通りであつた。
百米 十一秒五分四 青年 坂本君

來島生記
弘中生記

二百米	二十五秒五分一	高商	長谷川君
四百米	一分〇秒五分ノ三	高商	石田君
八百米	二分三十秒五分ノ三	高商	吉永君
走高跳	一米五十五	山中	今井君
走幅跳	五米六十五	山師	櫻井君
砲丸投	十一米〇六	青年	塚本君
圓盤投	二十五米五十	本校	寺戸君
槍投	四十四米五十七	宇部工	藤本君

◎競技部記事

△第一回競技會

六月廿八日競技部にては競技會を行つた。當日レコードは次の如くである。
百米 益田(十一秒) 紙本(十三秒)
二百米 益田(二十六秒) 阿武(二十八秒五分四)
四百米 來島(一分〇秒五分二) 秋山(一分九秒五分四)
八百米 篠原(二分二十五秒) 米廣(二分四十秒)
千六百米 石丸(五分三十三秒)
低障礙 弘中(三十一秒五分三)
一哩(千六百米) 第一中隊、四分十三秒五分二)
走幅跳 長嶺(五米六十三) 下瀬(四米八十五)
走高跳 *伊藤(五尺二寸) 末岡、森重(四尺四寸)
棒高跳 河内(八尺七寸)

△第二回競技會

九月二十二日競技部にては第二回競技會を行つた。當日のレコード左の通りである。
百米 來島(十二秒)
二百米 來島(二十六秒五分二)
八百米 篠原(二分三十五秒五分三)
千五百米 石丸(五分三十二秒五分三)
低障礙 青木(三十四秒五分二)
走幅跳 恒藤(五米五十二)
走高跳 伊藤(五尺三寸)
棒高跳 山下(五尺五寸) 河内(同上)
圓盤投 米廣(二十六米八八) 寺戸(二十二米五〇)
砲丸投 寺戸(八米八九)

ホップ 能美(十一米六十五) 兒玉(九米九十六)
圓盤投 村木(二十米七十五)
砲丸投 寺戸(九米四十五) 新谷(八米七十五)
槍投 *弘中(四十一米四十八)
以上の表中八名の上は三年以上、下部は一、二年生のレコードである。*印あるは十一年度山口縣體育大會のレコードを破りしものである。
右を各中隊別に成績を採點せしに一等第一中隊、二等第三中隊、三等第二中隊の順となつた。當日レコードの案外に悪かつたのは前日の雨で運動場の乾いてぬない爲である。

槍投 弘中(三十九米四〇)

△第三回競技會

十月六日、第三回競技會を行つた。レコード左の通りである。

- 百米 來島(十二秒)
- 二百米 益田(二十七秒五分三)
- 四百米 來島(五十八秒五分一)
- 八百米 篠原(二分三十秒五分一)
- 千五百米 石丸(五分二十二秒五分一)
- ハードル 弘中(三十三秒五分四)
- 走幅跳 熊谷(五米四十八) 能美(五米五十六)
- 走高跳 伊藤(五尺四寸五分)
- 棒高跳 河内(九尺七寸)
- ホップ 米廣(十米七十七) 寺戸(十米五十九)
- 円盤 寺戸(二十六米) 米廣(二十五米六十)
- 砲丸 寺戸(九米九十四)
- 槍投 阿武(三十九米八十五)

◎縣教育會主催體育大會

本縣教育主催第九回體育大會十月十四日午前八時から山口高岡前運動場に於て舉行せられたり。本校からは左の選手を派遣した

- 百米 益田 兼清 熊谷 吉衛
- 四百米 來島 勝男 藤田 鶴雄

かくて最終の結果は

- 一等 山中 三十九點 二等 師範 三十三點
 - 三等 岩中 十六點 四等 萩中 十五點
- となつた。本校は四等となつたが、之は降雨とか、選手の負傷とか他の事故の爲めで、實力は必ずしも劣つてはゐないことは識者の見るところである。來年は必ず會稽の恥辱を雪がねばならぬ。

◎陸上運動會記事

十月十八日開校記念日をトして、第二十四回陸上運動會舉行された。前日は心配する程の天気であつたが、當日は珍しい小春日和であつた。六百の健兒の意氣激昂たるを禁じ得なかつた。午前九時中隊別に集合、校旗を迎へて開校記念歌を合唱し終るや、直に運動準備に移る。第一回百米を以て愈々戦の幕は切られた。プロگرامも呼出の勞と、各自の熱心とによつて、豫定以上に進行し眞に見て居て氣持がよかつた。四百米、千五百米、百米、走高跳、走幅跳、棒高跳、ホップ、砲丸、円盤等、走技に、跳躍に、投擲に各選手を初め、各自平素の練習に鍛へた妙技を示した。番外に小學校のリレーレースが行はれた。参加校も萩附近數校に及び、應援も小選手の奮闘も見事な成績であつた。優勝旗は尋常科白水校に、高等科は明倫校に歸した。かくして諸種の競技も無事に進んで、最後に各中隊のリレーに於て、終に第二中隊勝利を得、優勝旗は其の手に歸した。本年も昨年の如く、あらゆる方面に選手二人宛を出して其の合計點の多少によつて勝敗を決したの

- 八百米 篠原 茂雄 岩田 貞夫
- 千五百米 石丸 孝一 植村 敬
- リレー 益田兼清 熊谷吉衛 篠原茂雄 來島勝男
- マラソン 石丸 孝一 吉田 勇
- ハードル 弘中 勝 青木 弘
- 走高跳 伊藤 正 米廣 松王
- 走幅跳 熊谷 吉衛 山村 治真
- 棒高跳 山下 達雄 河内 政一
- 砲丸投 寺戸 英雄 佐伯 義治
- 円盤投 寺戸 英雄 米廣 松王
- 槍投 弘中 勝 阿武 省三 以上十九名

右は伊藤徹成先生及井村先生に引率せられて、十二日及十三日の二日に分れて出發した。大會には昨下十八の中等學校、縣下各地の青年團選手が集つた。本校は昨年優勝旗を得たので、今年も之を失はじと意氣昂然たるものがあつた。豫選に於ても百米、四百米、ハードル等は一等を得た。然しリレーに於て不幸にして大失敗をした。

大會當日は本校選手が優勝旗を先頭としてトラックを一週した。午前中は曇天であつたが、晝前から降雨甚しく、レコードも極めて不真であつた。本校選手の成績は左の如くである。

- 走高跳 二等 伊藤(五尺三寸) 四等 米廣
- 円盤投 一等 米廣(二十五米七十)
- 四百米 四等 來島
- 棒高跳 一等 岩田

である。

かくして一同整列校歌を合唱し、校長の訓評を聞き、萬歳程に解散したのは夕陽西に沈んで、暮色蒼然として指月の峰を包む頃であつた。

因に本年度は關東地方大震災の爲樂隊などを廢して、萬事實業に節約を旨として嚴肅に舉行せられたが、各生徒の意氣に至つては益盛んに、平素の競技會に鍛練した努力を遺憾なく發揮せられた事は實に喜すべきことである。

左に當日のレコードを掲ぐ。

- 四百米 五八秒五分の一 來島 勝男
- 千五百米 五分一三秒五分の一 石丸 孝一
- 百米 一一秒五分の四 來島 勝男
- 八百米 二分二五秒 來島 勝男
- ハードル 三二秒五分の三 弘中 勝
- 走幅跳 五米五〇 能美 誠一
- 棒高跳 九呎七寸 山下 達雄
- ホップ 一一米五二 能美 誠一
- 走高跳 五呎四寸 伊藤 正
- 円盤投 二五米五〇 米廣 松王
- 砲丸投 三九米三五 弘中 勝
- 砲丸投 九米八二 寺戸 英雄

(福田幹雄記す)

◎書道部記事

我が書道部は、十月二十日第十五回選書展覧會を催し、午前十時より一般公衆の觀覽を許したり。我が出品物は、例年の方法により、前學年間に三回と、本學年間に四回、教師監督の下に課書せしめ、其の中より佳良なるものを選拔し、等級を付せられたるものなり。今その成績を記すれば左の如し。

- 一等 林 不二雄 阿武 義輔 片桐 恒夫 池上 武夫
- 二等 十二人 三等 三十九人

此の外参考品として、五年の關、堀永兩君の筆蹟あり。何れも活氣ある筆勢、穩健なる筆力、共に我等の範となすに足れり。今年出品物が昨年のに比して少かりしは、本年度よりは、習字科ある一、二年にのみ課書せしめられたるに依る。但陳列品中、第三學年(現在四學年)とありしは、前學年に於て、該學年に猶習字科を課せられたるに依れり。

かくして當日の展覧會は、午後四時に至りて閉ぢたり。此の日前來觀者にして、午後に至りて降雨となりし爲か。一般觀覽者の餘り多からざりしは、我等の遺憾とする所なり。將來我が部の益々隆昌に赴かん事切望して已まざるなり。(大永金太郎誌す)

◎書道部記事

十月廿日、四、五年生徒保護會の日を卜し、吾が部は、南生徒控所に成績品展覧會を催し、午前十時より午後四時迄、公衆の隨意

油繪に於て、四年、大和君の「秋の夕暮」外三點。秋の夕暮は、さびしくも又淡くはなやかな色調に依つて詩趣を畫面に漂す。三原君の小品一點、三年、小野君の小品は一點は共に兩君を知るには充分でない思ふ。五年、柏村君の「菊」外二點。昨年比し、無意味な筆數の小なくなつたのを喜ぶ。たゞ會場、陳列方法に不備だつたのは、出品者、鑑賞者に甚だすまなかつた。今回は此點に一層考慮を望む。終りに、諸君の天啓を確保して、自ら創作せられん事を切望す。(柏村正記す)

◎理科部記事

我理科部は、皇太子殿下御成婚式を期して、盛大なる展覧會を催す豫定なりしも、東都地方震災の爲め豫定通りなる能はず、十月二十日父兄會を期して催し、午前十時より午後四時迄公衆の觀覽に供したり。

一、博物部。是とて注意を引くものあらず、常識演習の目的を以て、文學上に現はるゝ動物、類似たる動物の差異、及び一部の標本を陳列せり。明年は一層進歩せる方を以てし、生徒諸君の参考物等出品あらん事を望む。

二、理化部。昨年例に倣ひ大に改良を加へたり。理化學普及を主眼として智識の普及を計りたり、今之を四部に分つ。
イ、生徒實驗室。公衆の日常生活に必要な日用品の鑑定法、對照表、又一般化學製造工程表並にその標本、有名なるあの毒瓦斯の種類、原料、常識演習の目的として「ビデオミ

鑑賞に供したが、一般來觀者の餘りに少なく、僅に十數人に滿たなかつた事は物足りない感があつた。次に當日の成績及び感想を記す。

- | | | | |
|------|-----------|----|----|
| 受賞者 | 一等 | 二等 | 三等 |
| 第五學年 | 三人 | 三人 | 六人 |
| 第四學年 | 中村 修 | 三人 | 八人 |
| 第三學年 | 中村十郎 小野靜雄 | 四人 | 一人 |
| 第二學年 | 秋山 晃 | 四人 | 八人 |
| 第一學年 | 河村忠雄 | 三人 | 四人 |

部長田總先生の近作二點を陳列致されしは、委員の深く謝するところ。吾人は部長の眞意を體して、益々吾が部の興進を期せんと欲す。

生徒出品畫の中、水彩畫に於て、四年村上君の「静物」外三點。アキレットな色調を以て靜かに制作の興を喚く、その優しい情致、沈着な氣持は、そのまゝ受け入れる事が出来る。中村君の「臺所」外七點、美しく緻密な君の性格の流露を親しく思ふ。大和君の「秋のおとづれ」外一點。筆刷に洗練を前す。伯佐君の人物、三原君の「陸」外一點等の佳作、三年中村君の「静物」外五點。しつかりした根底の上に、着々として眞摯な歩を進めて居る。君の如き天才を有するは吾が部の誇るところ。君の爲、吾が部の爲に、君の自愛を乞ふて止ない。又、小野君の「風景」外二點。小橋君の風景、玉置君の静物等の佳作。一年、新庄君の静物。君の將來を望む。

ンの効用に就て「或は是は博物科に入るべきものかも知れず」、「潜水艦に就て」等、その他實驗機械、工業用機械の模型、及び生徒諸君の特製品等を陳列表示せり。機械模型の運轉し得べき物は全部運轉せしめたり。香水、噴水は一般觀覽者の目を引けり、生徒の出品中にも又見るべき者あり五年にては内藤君の化學方程式表、大谷、中村、横田三君共作の揚水器、自家廣告の様なれど多田、福田及び筆者等共作の物理公式、四年生橋本、山本兩君共作の化學重要な基の表、その他三年生林君の飛行機等特に注意を引けり

- 二三申し譯的のものありしは遺憾。
 - ロ、理化學標本室。天文用望遠鏡その他數多の標本、實驗機械等を陳列せり。
 - ハ、特別教室。活動寫真機、エ光線管その他の機械を陳列す。五年生杉、小田、三輪、弘中君等の出品たるイルミナトーションは大いに注意を引きたり。
 - ニ、賣店。昨年例に倣ひ生徒特製の「ソース」齒磨粉、香水等を販賣して好成绩を擧ぐ。「ソース」を賣り盡し保證人へ賣る分の無くなりたとして、お目玉頂戴等は當日の喜劇と云ふべし。
- 斯の如く我等が展覧會は有意義に終りたり。唯だ午後より雨天の爲め、一般觀覽者の少なかりしは遺憾なりき。されど製覽者中小數にてはありしが、發動機、蒸氣エンジン及び木材乾留等に付きて質問せられたる方あり。我が部の公衆に及びつゝあるを感じて喜ぶ。明年は一層の努力を以て我が理科部の發展を助けられん事

を切に〜望む。

(坂博記す)

◎地歴部記事

我が部は十月廿日を下し、地歴部成績品展覧會を催せり。成績品は全學年にわたれる物にして、其の外参考品として、我が部の標本の一部をも陳列せり。當日保證人會の都合により、陳列場の狭き爲、出品全部を陳列する能はざりしことは、遺憾なり。午後より雨天となりて、諸友の努力の結晶を、一般公衆に觀覽せしむる能はざりき。出品中第一等は、六名にして、五年松尾松千代君作「大井村模型圖」四年大谷正信君作「南米事情の宣傳」同じく木島俊雄君作「美福鐘乳洞」三年田村秀雄君作「萩町全圖」二年永松三衛君作「スエズ大運河」一年山根芳郎君作「パナマ運河」なり。何れも、精巧緻密困難の跡歴然として、會場に一異彩を放てり。二等賞は十七名、三等賞は五十三名にして、合計七十六名なり。一般に昨年に比し、出品數も増加し、又進歩の跡見ゆるるは、大に喜びとすべき處なれども、或る點より見れば、義務的になりすぎ却て正確を缺ぐ弊あるものゝ如し。唯徒に華麗にながれず、正確精巧を第一目的として、將來我が部の發展せんことを望みて止まざるなり。

(堀永生記)

◎中隊學科成績表

學科成績を各中隊別により記すれば左の如し。

△大正十一年度第二學期各中隊學科成績表	
順位	中隊
一	二
二	一
三	四
四	三
平均點	六九、二〇
	六八、一六
	六七、九三
	六七、四八
△大正十一年學年各中隊學科成績表	
順位	中隊
一	二
二	三
三	一
四	四
平均點	六八、三四
	六七、九七
	六七、六四
	六七、三二
△大正十二年第一學期各中隊學科成績表	
順位	中隊
一	四
二	二
三	一
四	三
平均點	六八、五八
	六八、三一
	六七、三九
	六七、一五

◎大正十二年度校友會役員

- 會長 岩田 校長
- 副會長 駒田 先生
- 副會長 岡部 先生

- 委員 長嶺 正博 杉山 直入 伊藤 貞一 守重 眞夫
- 委員 惠美須屋三吉 内藤 昌 小方 數馬 池田 三郎
- 委員 山縣 勝 田村 義雄 岸 音熊 神野 克己
- 委員 宮崎 三郎 下瀬 知雄 木村 輝房
- 委員 西村 秀隆 鹿島 國好 谷井 力 原 龍三郎
- 委員 弘中 勝 熊谷 吉衛 佐伯 義治 林 不二雄
- 委員 野村 久一 山田 哲 山根 文作 守重 光雄
- 委員 久保田繁二 村木 七郎 横山 剛照
- 委員 山崎 正 杉山 直人 松尾松千代 伊藤 繁
- 委員 關 信常 松本 友助 厚東勝太郎 山本 敏
- 委員 山本 浩 長原 誠三 永見 眞人 内田 元隆
- 委員 柳井 敬三 河野 三郎 伊勢屋恭禪
- 委員 長嶺 正博 杉山 直入 伊藤 貞一 守重 眞夫
- 委員 柏村 正 伊藤 恒夫 大和 義男 村上 景介
- 委員 三原 清 高尾 延彦 田中 松一 益田 篤士
- 委員 中村 十郎 河村 祥三 松浦兼三郎 田村 季雄
- 委員 小野 靜雄 香川 俊男 天野 俊雄 森澤 史郎
- 委員 小原 美紀 秋山 晃 末岡 俊介 木村 利信
- 委員 津田 巖男 山田 重雄 波多野爲一 福田 幹雄
- 委員 齋藤 彰 藤原 茂雄 青木 弘 濱野 三郎

- 委員 倉重 達郎 木島 俊雄 内山 誠 山本 馨
- 委員 瀧口 三郎 谷田 篤士
- 委員 彼多野爲一 吉津 信一 堀永昌三郎 大谷 正信
- 委員 吉田 頑 田中 松一 市原 茂樹 山田 明
- 委員 大和 忠雄 藤井 勇 野稻 清定 兒玉 玄太
- 委員 村岡 先生 副部長 田中 先生
- 委員 横田司馬年 坂 博 小田 好長 中村 靜雄
- 委員 宮原 恭一 進藤 研治 木島 俊雄 橋本 士郎
- 委員 山本 馨 多田 利雄 堀田 寛悟 廣田 一雄
- 委員 中津江 功三 輪 公 守重 眞夫 平林三七雄
- 委員 首藤 誠一 竹内 六郎 平田 光雄 安達 丙作
- 委員 阿武 義輔 山田 明 守重 光雄 守重 信雄
- 委員 津森 剛 仙波 專一
- 委員 綿貫 傳三 新山牛次郎 久保 一郎 中島 信平
- 委員 大木金太郎 永富 五郎
- 委員 杉 丙三 三輪 公 平林三七雄 彌重 雄次
- 委員 弘中 勝 岡田 友市 岩田 貞夫 平田 光雄
- 委員 長屋 修 永田宗一郎 阿武 省三 益田 愛清
- 委員 山本(百)先生 副部長 井村先正 同 板垣先生
- 委員 下部 實雄 田中 登 石丸 孝一 伊藤 貞一

惠美須屋三吉 來島勝男 阿武 四郎 小方 敷馬
 田中勝太郎 藤田 鶴松 藤田 寛信 植村 敬
 村木 忠治 阿武 省三 村木 喜八 小橋 一義
 村木 七郎 井上 五郎

器具係 係長 河野先生 副係長 伊藤(恒)先生 同 郷田先生
 委員 山田 重雄 小原 義雄 吉賀 春一 西村 一丸
 吉屋 信若 西村 魁介 藤村 五郎 三島 元平
 柳部 要範 文吾 藤井 武雄 中野 芳郎

褒賞係 係長 藤井先生 副係長 板垣先生 同 本間先生
 委員 池田 謙三 阿武 馨 福田 幹雄 大谷 三熊
 百濟 茂友 西島 丈夫 井關 清榮 山本 馨
 野村 久一

競技係 係長 山本(百)先生 副係長 井村先生 同 相島先生
 委員 伊藤 正 石丸 孝一 來島 勝男 寺戸 英雄
 多田 利雄 恒藤 雄碩 中津 桂三 有美 邊
 末永 儒

◎中隊幹部 (大正十二年度)

第一中隊長 杉 丙三
 小隊長 伊藤 恒夫 池田 謙三 多田 義男
 第二中隊長 伊藤 貞一
 小隊長 坂 博 來島 勝男 石丸 孝一
 第三中隊長 弘 中 勝

小隊長 原 龍三郎 惠美須屋三吉 山崎 正
 第四中隊長 福田 幹雄
 小隊長 長嶺 正博 迫山 六郎 鹿島 國好
 旗手 青木 弘
 分隊長、旗手護衛は省略す

◎大正十一年度校友會經常費收支決算書

一金貳千參拾壹圓九拾六錢五厘	前年度繰越金
內 譯	職員生徒會費
金貳圓貳拾九錢五厘	入
金千八百貳拾七圓參拾七錢	出
金貳百貳圓參拾錢	高
內 譯	前年度繰越金
金百九拾參圓七拾八錢	職員生徒會費
金百六拾五圓九拾六錢	入
金參拾壹圓九拾錢	出
金百七圓六拾壹錢	高
金貳百參拾貳圓參拾七錢五厘	前年度繰越金
金拾壹圓五拾錢	職員生徒會費
金百四拾五圓七拾五錢	入
金參圓四拾五錢	出
金四圓九拾八錢	高
書 籍 部	道 論 部
遊 藝 部	球 球 部
短 艇 部	庭 球 部
野 球 部	柔 道 部
劍 道 部	劍 道 部

金參圓四拾壹錢
 金四百貳拾參圓六拾六錢
 金貳百參拾壹圓九錢
 金貳百九拾四圓八拾六錢
 金五拾圓也
 金五拾圓也
 金八拾壹圓六拾四錢
 以上

一金參百四拾貳圓五拾八錢
 內 譯
 金貳百七拾八圓五拾貳錢
 金五拾圓也
 金拾四圓六錢
 一金參百四拾貳圓五拾八錢
 內 譯
 金參百四拾貳圓五拾八錢
 以上

◎大正十一年度校友會基金收支決算書

一金六千參百拾參圓貳拾七錢也
 內 譯
 金五千八百四拾壹圓貳拾六錢
 金貳拾圓也
 金五拾圓也
 金四百貳圓四錢
 一金六千參百拾參圓貳拾七錢
 內 譯
 金七拾八圓八拾錢
 金六千貳百參拾四圓四拾七錢
 以上

大正十一年度校友會基金收支決算書
 前年度繰越金
 矢田部嘉友遺族
 寄附金
 經常費ヨリ蓄積
 預金
 利息
 支 出
 高

大正十一年度短艇蓄積費收支決算書

前年度繰越金
 矢田部嘉友遺族
 寄附金
 經常費ヨリ蓄積
 預金
 利息
 支 出
 高

統計のいろいろ

大正十二年度防長教育會員實生にして本校出身者左の如くである

東大英文科一年	阿部 芳甫
東大史學科一年	河村 久三郎
五高文甲一年	下村 定儀
五高理甲一年	井野 孝夫
山口高理甲一年	藤野 孝夫
神戸高商護科	原 田 孝
東京高師文科一年	鳥居 吉雄
東京高師理科一年	石津 有恒
商大専門一年	

同窓會誌

(自大正十一年十一月
至大正十二年十月)

○評議員會

十二月十七日、河野幹事宅にて開會、幹事選舉をなす。

○基金募集催促

大正十二年一月廿五日、基金募集催促の爲め、往復端書五百通發送。

○新入會員歡迎會

三月五日、卒業式後母校寄宿舎道場にて開催す。出席者、舊會員厚東太郎、高橋由之、菊屋繁輔、和田渉、末岡周介、山本百合熊、中津江廷彦、板垣克、河野通毅の九名、新入會員七十五名、來賓岩田會長、金子、古川、駒田三先生。
厚東太郎君の開會の辭、河野孝夫君の新入會員を代表しての謝辭會長の誠告、和田渉君及駒田先生の激勵の辭、岡智敏、藤田昇君の所感演説等あり、折詰、莫子の響應ありて詩吟、ゆ歌の合唱等勳を盡して、最後に高橋由三君の發聲にて同窓會の萬歳を三唱して解散す。

○臨時評議員會

三月十二日午後七時より、米屋町風月堂樓上にて開會す。岩田會長より會則第六條第一項改正の提議あり。満場一致にて賛成す。尙本年の町會議員改選に當りては、同窓生中より立候補をする者ある時は、同窓生有志團を組織して極力之を援助する事に決定す。當日出席者、岩田會長、厚東、菊屋、和田、齋藤、長井、中津江、河野七評議員

○獎學賞授與

三月五日母校卒業式に際し、七席以上の者に獎學賞として寫眞一葉宛を授與す。(姓名校報参照)

四月九日始業式の際、各學年五席以上の者に獎學賞として本立一組及賞狀を授與す。受賞者左の如し。

一學年	小橋一義	野稻清定	永富五郎
二學年	久保一郎	大永金太郎	
三學年	田村義雄	岸音熊	大島政輔
四學年	大和忠雄	松浦兼三郎	
一學年	河邊芳太郎	多田利雄	野村久一
二學年	井町勇	山本馨	
三學年	青木弘	福田幹雄	杉丙三
四學年		有田勝正	

○同窓生有志小集

四月廿五日、菊屋孫輔氏邸に和田、長井、齋藤、河野の四氏小集會を開く。原東太郎、末岡周介、金子眞一の三君今回の町會議員立候補せられしを以て、同窓生有志團を組織して極力後援せんが爲め、其の方法を協議す。

○在萩有志臨時大會

菊屋、和田、齋藤氏等の幹旋にて、四月廿八日午後八時より、唐樋町公會堂に於て在萩有志臨時大會を開く。出席者左の如し。
菊屋、和田、齋藤、厚東(太)、末岡、金子、山本、伊藤、堀、石原、松村、杉山、厚東(晴)、板垣、長井、河野、以上十六人
和田渉氏議長席につき、今回の町會議員選舉につき立候補を宣言せられたる厚東、末岡、金子三氏を後援するに決し、其の方法を協議す。菊屋、和田、齋藤三氏を實行委員に擧げ、運動に着手するに決す。

○臨時評議員會

六月八日母校に於て開催、特別會員瀧部先生病氣につき見舞品を贈る事とす。町會議員選舉の件と雑誌の際協議する所あり。基金募集の件等協議、出席者、厚東、菊屋、山本、和田、齋藤、河野氏等七人。

○學生辯論大會

八月十日當地歸省學生の辯論大會を公會堂に於て開催するにつき本會有志は之を後援するに決し、厚東(太)、岡村、菊屋、末岡、長井、金子、厚東(晴)、河野の諸氏はそれ〴〵寄附するところありたり

○基金應募狀況

昨年八年基金募集を開始せしが、其後滿一ヶ年を経て本年八月卅一日の現況左の如し

應募出金總額壹千五百六拾七円也
他ニ未納金(申込ノミニテ)四百四拾叁円也

關東大震災に就ては、本會よりは震災地の會員八十名許に見舞狀を出しました、尤も住所の分らぬ者には出しませんでした、其の中二十八人からは返事がありました、附箋で返つたのは二三通です、其他の人は返事がありませんが、皆無事です

* * * * *

○名簿發行

本年度名簿發行に就ては東京在住阿部御畑氏に依頼する所あり。氏は非常の努力と、時間とを犠牲にして徹底的に幹旋せらる、幸に安價に且體裁よく發行する事を得たり。殊に會員住所の異動訂正に就ても、種々奔走せられ、各會員に發送する迄、一切の世話なせられたり。同氏の好意に對しては、厚く感謝する所なり。

○第八回定期大會

八月八日午後七時より橋本町富月亭に於て開く。出席者左の如し
特別會員 駒田卯三郎 岡部常一
運常會員 厚東 太郎 平田 由之 岡村 喜興 菊屋 孫輔 玉木 正行 石原 忠亮 和田 渉 長井 寛法 齋藤 壽福 金子 眞一 厚東 晴二 國重 爲人 増山 三郎 行本 盈三 杉山 眞一 河野 通毅 板谷 一馬 國重敬四郎 堀 元助 堀 儀一 門田 莊吉 富田 正治 小枝 慎一 植村 文雄 秋山 宗一
以上計二十七人

會規第六條第一項改正の議(三月十二日評議員會の條参照)に就て協議し、相當議論ありしが、遂に原案可決す。斯くて配膳にうつり歡談高歡、正子過盛會程に閉會す。

會 員 訃 報

大正十一年十一月以後、會員訃報に接したるもの左の如し
茲に謹みて哀悼の意を表す
富田積君(第十五回卒業) 十一月廿九日病死
草刈稔君(第十八回卒業) 久しく病氣にて歸省中なりしが三月六日病死
驛元三郎君(第十回卒業) 吳にて海軍奉職中四月廿四日病死
大谷三郎君(第七回) 久しく病氣なりしが五月十八日死亡
同氏令兄卓三氏より遺志に依り金貳拾円を本會基金中に寄附せらる
伊佐小次郎君(第十二回卒業) 六月廿三日病死
松村六郎君(第廿回卒業) 病氣にて福岡大學病院にて療養中なりしが七月四日死去
松原義方君(第十四回卒業) 八月十八日病死
小倉誠一君(第八回卒業) 八月廿一日午後一時淡路國假屋沖に於て、第七十號潜水艇運轉に際し、公務を以て乗組み遭難、海軍省に於て乗組員一同十月一日を以て殉難と認定せられた、誠に痛惜の至りであります

大正十二年十二月十日印刷納本
大正十二年十二月十五日發行
(非賣品)

發行兼編輯者 山口縣阿武郡萩町 三輪 勗

印刷者 山口縣吉敷郡山口町道場門前九番地 大津 い わ

印刷所 同 山口響海館

